

## 「イランのクルド」とサファヴィー朝の「強制」移住政策\*

山口 昭彦

### “Iranian Kurds (*Akrād-e Īrān*)” and the Safavid “Forced” Migration Policy

YAMAGUCHI, Akihiko

It is widely recognized that, during an existence of more than 200 years, the Safavid state (1501–1722) evolved from a nomadic dynasty, militarily and politically supported by Turkmen tribes, into a more centralized state run by elite groups of different ethnic origins. One of the most important driving forces of this change was, unsurprisingly, a series of radical reforms pursued by Shah Abbas I (r. 1587–1629), the fifth Safavid king, who severely curtailed the political power of the Turkmen tribes and promoted Georgian and Armenian *gholāms* of Christian origin to key positions in the central government and in the provinces.

It is, however, not well known that some Kurdish tribal chiefs also gained power around the same period. Although until the end of the sixteenth century, the Kurdish tribes were largely marginalized in the Safavid regime, from that time on some were given governorship in important provinces and others even rose to the highest ranks in the central government.

Focusing on these “successful” Kurdish tribal groups, this paper explores how and why they came to occupy a paramount place in the central and provincial administration and discusses how their rise contributed to the transformation of the Safavid state into a multiethnic empire.

This paper’s arguments can be summarized as follows.

First, almost all the Kurdish tribes that were elevated in the latter part of the Safavid era had already been relocated from Kurdistan, the western frontier, to other parts of Iran during the reign of Shah Tahmasp (r. 1524–76), the second Safavid ruler, mainly in order to defend the province of Khorasan against the Uzbeks.

Second, these were rather minor tribal groups, often holding limited or no fixed hereditary territories, and thus they accepted Safavid sovereignty probably without any resistance. Some of them had even lost their paramount

---

**Keywords:** Iran, the Safavid Dynasty, Kurds, Ethnic Groups, Tribes

**キーワード:** イラン, サファヴィー朝, クルド人, 民族集団, 部族

\* 本研究はJSPS 科学研究費補助金「近世帝国としてのサファヴィー朝史研究：多元性と均質性の相克」(2011–2014年度, 研究課題番号: 23320149) および「近世=近代イランにおける「帝国」統治の変容とクルド系諸侯」(2014–2018年度, 研究課題番号 26370830) の助成による成果の一部であり, 第53回日本オリエント学会大会(2011年11月20日)での口頭発表「サファヴィー朝の多民族統合と移住政策: クルド系の東部移住をめぐる」をもとにしている。

leader and were divided into subgroups, each of which entered into the service of any one of the powerful Turkmen chiefs. In short, the Safavids found them to be relatively mobile and manipulable groups, as were the Turkmen tribes. In these points, they stood in stark contrast to other, more powerful, Kurdish tribes that continually strove to keep their hereditary domains, sometimes fiercely resisting Safavid rule or even switching their loyalties to the neighboring Ottomans.

Third, without Shah Abbas I's personal favor, they would never have been extensively promoted within Safavid politics. Demonstrating their abilities and loyalty to the shah, they could be integrated into his close retainers group and were given posts in important provinces as well as in the central government.

Given the fact that during the civil wars following the collapse of the Safavid state, the successive claimants to Iran's throne considered the Kurdish tribes as their important partners. It can be said that the incorporation of the Kurdish elite into the Safavid administration, along with that of the much more famous *gholāms*, facilitated the start of the transformation of Safavid Iran into a multiethnic state.

はじめに

#### I. ホラーサーンへの移住

- 1 チェメシュゲゼク族
- 2 パーズキー族
- 3 チェギャニー族
- 4 スィヤーフ・マンスール族
- 5 ザンギャネ族
- 6 ズィーク族

#### II. 「イランのクルド」の意味するところ

#### はじめに

現代イランの領域やアイデンティティーの礎は、直接的にはサファヴィー朝（1501-1722）支配の200年に築かれた。この時代にイラン高原は単一の政治権力によって統合され、王権によるイラン文化の保護に加えて、シーア派信仰の強制と浸透がこの地域に住まう人々とその地の政治権力に独自性を付与する契機ともなったからである。事実、18世紀初頭のサファヴィー朝の崩壊後、政治的には混乱や分裂を経験しつつも、イランという

#### 1 シャラフ・ハーン・ビドリシーの意図

#### 2 「イランのクルド」に見られる共通項

#### III. 辺境防衛から宮廷エリートへ

- 1 移住先での在地化
- 2 アッバース1世による討伐
- 3 ホラーサーンから他の辺境へ
- 4 中央政界での台頭
- 5 ゴラームの下で

おわりに

枠組みは強力に生きのび、半世紀を経て、カージャール朝（1796-1925）によって再び統一された。サファヴィー朝以降、多様なエスニック集団を抱えつつも、王朝の盛衰を越えて存続する領域国家としてのイランが生成されていったと言えるだろう。

一見、自明に見えるイランのもつこの持続性はさまざまな角度から説明し得ようが、私自身は、西部辺境にあったクルド系諸部族が、サファヴィー朝やその後イラン高原に現れた政治権力の支配に包摂されていく過程—それはまた、イランの西部国境が徐々に形成され

る過程でもあった一に焦点を当てること、この問題に対するひとつの見通しを立てることを目標としている<sup>1)</sup>。

サファヴィー朝によるクルド系諸部族に対する統合政策については、私自身、いくつかの論考によってその一端を明らかにしてきた(山口 2007, 2011, 2013; Yamaguchi 2012)。その大要は以下の通りである。

一般に、サファヴィー朝は、主にトルコ系諸部族から構成されるキズィルバーシュ Qezelbāsh<sup>2)</sup> の軍事力とイラン系(タージーク系)都市官僚名家の行政実務能力を基盤として成立したとされるが、それは、必ずしも他のエスニック集団を排除したことを意味しない。実際には、建国当初から支配地域内部のさまざまな民族・宗教集団の統合をも積極的に推進した。事実、オスマン朝との境界に位置するクルド系諸部族についても、これらを緩やかに包摂することを目指し、その方策として、かれらを束ねるクルド系諸侯(アミール amir) の在地支配権を温存するかたわら、君主とクルド系諸侯との直接的かつ濃密な君臣関係の構築を図った。とくに、第2代タフマースプの治世には、アミールたちの子弟を宮廷で養育したり、あるいは王のコルチ qūrchi (近衛兵) として徴募し、さらに、こうして王の側近くにあったものたちを、後に出身部族のアミールに任じていった。他方で、王朝の支配体制全体に目を転じれば、16世紀末までは、王朝創建の立役者であったトルコ系諸部族が国家権力の政治・軍事部門をほぼ独占しており、これに対し、その多くが王朝成立後の征服活動でようやく支配を受け入れたクルド系諸部族はおおむね周縁的な存在にとどまっていた。

ところが、王朝中興の祖アッバース1世

‘Abbas I (在位 1587-1629) の登場をひとつの契機として、クルド系諸侯とサファヴィー朝との関係は大きく変化する。結論から言えば、遅くとも17世紀に入る頃から、王朝支配下のクルド系諸部族は確実にイランの政治空間に組み込まれていった。その過程は、主として二つの現象によって説明しうる。一つは、かつては接近困難な山城などを所領支配の拠点とした有力クルド系諸侯も、17世紀半ばにかけて相次いで平野部に都市を造営し、定住化するようになったこと、もう一つは、クルド系諸侯の中からイラン各地で知事に任じられるものが現れたのみならず、その一部は中央政界で重責を担うようになったことである。これら2点について、より実証的に明らかにすることが目下の課題である。

このうち、本稿では後者の現象を取り上げる。サファヴィー朝の支配を受け入れたクルド系諸侯の中には、16世紀後半以降、クルド地域以外のイラン各地、とりわけホラーサーンやペルシア湾岸などの辺境地域に移住させられて知事職を与えられ、さらに17世紀になると大宰相職など中央政府の枢要なポストを手にするものまで現れる。本稿で明らかにするように、この現象は、アッバース1世による改革以降のサファヴィー朝の権力編制の変容と密接に関わるとともに、多民族国家イランの形成にとっても無視できない意味をもっていたと考えられる。

サファヴィー朝が、国内各地にあった多様な集団を統合するにあたっての戦略として、それぞれの民族性を踏まえつつ、権力中枢の外側にある民族集団から意識的にエリートを調達し、とりわけその民族的・部族的出自や集団間の緊張関係を政治的に巧みに利用することで統合を進めようとしたことはすでに指

- 1) 特定のクルド系部族に焦点を当ててこの過程の概観を試みたものとして、山口 2015; Yamaguchi 2015.
- 2) 本稿では、ペルシア語史料に表れる用語のローマ字転写にあたっては現代ペルシア語の転写方式を採用し、それに基づいてカタカナ表記を行った。ただし、すでに人口に膾炙したカタカナ表記がある場合には、そちらを優先した。また、トルコ共和国内の地名に関しては、現代トルコ語による表記も併記した上で、それに基づいたカタカナ表記を採用した。



摘されている (Matthee 1994: 85-88)。さらには、こうした政策の一環として、アッバース1世がゴラームと呼ばれたコーカサス出身者を中央政府の要職や地方官職に任じたことで、アッバース1世治世以降の後期サファヴィー朝期には支配エリートの多民族化が大きく進んだことも実証的に明らかにされている (前田 2009)。上記のような17世紀に入る頃からのクルド系諸部族の台頭という現象もまた、こうしたサファヴィー朝の多民族統合の戦略やそれにともなる支配体制の変容に照らして理解すべきであることは言うまでもない。

さて、多様な民族集団の統制と統合を図るために、サファヴィー朝を含めイランの歴代王朝がしばしば部族や宗教的少数派などを集団的に移住させたことはよく知られている。この分野での先駆者であるジョン・ペリー John Perry は、「近代イランの揺籃期」としてのサファヴィー朝中期 (アッバース1世治世) からカージャール朝初期まで、すなわち1590年から1797年の2世紀においてことに強制移住の事例が多く見られたとしている。その主な理由としては、「さまざまな地域や独立した諸民族を生存可能な国民国家へと統合する」という支配者たちの意図を指摘している (Perry 1975: 200)。「国民国家」という概念を前近代のイランに当てはめることには違和感を感じるが、多様な集団の政治統合の手段として強制移住が実施されたことは、ペリーの指摘するとおりである。ただ、ペリー論文は、強制移住の問題にかかわる諸論点を理解するうえでは今もって有益だが、ペリー自身が述べるとおり、取り上げられた個々の事象についてはさらなる検証が必要である。

これに対し、前田弘毅は、対象と時代を限定することで強制移住についてより緻密な議論を展開している。すなわち、アッバース1世時代にコーカサス地方とイラン高原との間

で行われた強制移住が、一方では、在地社会の権力構造の再編をもたらすとともに、他方で、コーカサス出身者の中央政界での台頭などサファヴィー朝の支配体制の変容にもつながるものであったことを明確に論証している (Maeda 2006; 前田 2009: 第5章)。とくに、すべての移住政策が明確なビジョンや計画に基づいたものであったとは言えないにせよ、アッバース1世が、各集団の民族的アイデンティティを踏まえながら移住させることで緊張関係をつくり出し、宮廷をはじめイラン各地に新たな政治秩序を構築したことを強調している<sup>3)</sup>。

本稿では、これら先行研究を踏まえつつ、コーカサス出身者と並んでほぼ同時期にサファヴィー朝の政界で活躍するようになったクルド系諸部族の事例を取り上げることで、この王朝による強制移住のもつ歴史的意義に新たな光を当てることをめざしたい。

本稿で導きの糸となるのが、16世紀末、アナトリア東部ビトリス Bedlis/Bitlis のアミールであったシャラフ・ハーン・ビドリースィー Sharaf Khān Bedlisi が著した『シャラフの書 Sharaf-nāme』である。クルディスタン各地に割拠するクルド系諸侯の事績を論じたものとしてつとに知られるこの史料では、先に指摘したようなイラン各地や権力中枢で活躍することになるクルド系諸部族の多くが、「イランのクルド *Akrād-e Īrān*」と総称されている。シャラフ・ハーンは、いったいなぜ、これら諸部族をこのように呼んで、サファヴィー朝に服属した他のクルド系諸部族と区別したのであろうか。この問いに答えることが、上に示した諸問題を解くにあたってのひとつの手がかりになるであろう。

以下では、まず、クルディスタン以外のイラン各地で知事職を得るクルド系諸部族のほとんどが第2代君主タフマースブ Tahmāsb (在位 1524-1576) 治世にイラン中部から東

3) これらのほか、アッバース1世によるアルメニア人の「強制移住」を扱ったものとして、Herzig 1990。

部にかけての諸地域に移住させられたものであったことを示し、彼らこそが、『シャラフの書』の中で「イランのクルド」と呼ばれたものにほぼ相当することを確認する。そのうえで、サファヴィー朝に一時的であれ臣従した他のクルド系諸部族と比較しながら、「イランのクルド」がどのような特徴をもっていたのかを検討する。最後に、アッパース1世の改革を機にサファヴィー朝の支配体制が大きく変貌するなかで、彼らが体制内部でどのような役割を果たしていったのかを具体的に検証する。これらの作業によって、サファヴィー朝によるクルド系諸部族に対する移住政策の特徴と多民族国家イランの形成過程の一端が浮かび上がるであろう。

## I ホラーサーンへの移住

表1は、サファヴィー朝に服属したクルド系諸侯のうち、クルディスタン以外の地<sup>4)</sup>で統治権を与えられたものを列挙したものである。この表から、特定の部族出身者がこうした統治権を与えられていたことがわかる。特定の部族とは、スィヤーフ・マンズール *Siyāh Manşūr*、チェギャニー *Cheganī*、ザンギャネ *Zangane*、パーズーキー *Pāzūkī*、チェメシュゲゼク *Chemeshgezek*、ズィーク *Zik* などである。結論から先に言えば、これらの部族の多くに共通するのは、第1に、何らかの事情によりすでにタフマースプの時代にホラーサーンなどに移住させられていること、第2に、シャラフ・ハーンによって「イランのクルド」と分類されていることである。本章では、上に挙げたクルド系部族がどの

ような経緯で移住させられたのかを確認しておこう。

### 1 チェメシュゲゼク族

アッパース朝あるいはセルジューク朝の血を引くとされる、この部族の支配家系の歴史は古い。後世の史料によれば、すでにセルジューク朝第2代君主アルプ・アルスラーン *Alp Arslān* (在位 1064-72) の治世には東部アナトリアのエルズルム周辺を掌握していたともいわれる (*Sharaf* 1: 163)。アクコユンル朝第5代君主ウズン・ハサン *Uzun Ḥasan* (在位 1453-78) 治世の1456年にはその配下に入り、王家との間に婚姻関係を結んでいる<sup>5)</sup>。

サファヴィー朝が成立直後に東アナトリアを支配しようとした際に、この部族のアミール、ハーッジー・ロスタム・ベグ *Hājji Rostam Beyg* は、サファヴィー朝初代君主エスマーイール1世 *Esmā'il I* (在位 1501-24) に臣従し、旧領は取り上げられたものの、イラク地方に所領を与えられている。ハーッジー・ロスタム・ベグは1514年のチャルデラーン *Chalderān* の戦いでもサファヴィー朝側についたが、その後、オスマン朝に臣従しようとしてスルタン・セリム1世 *Selim I* によって処刑されてしまう。ただし、部族自体は、オスマン朝のもとで旧領を回復している (*Sharaf* 1: 164-169, 257, 329)。

他方、この部族のうち、何らかの事情でサファヴィー朝側に残ったものもあったと思われる。表1の通り、かれらは主にホラーサーンで生き延びていくことになる<sup>6)</sup>。史料によれば、アッパース1世治世の1005-6/1597-8

4) 「クルディスタン以外の地」というのは曖昧な概念だが、あるクルド系部族が本来の支配地域から遠く離れた地域に移住させられる場合を想定している。たとえば、もともとアゼルバイジャン地方に拠点をもつクルド系諸部族が同地方のマラーゲやマランドの統治権を得た場合などは、ここでは対象としない。

5) チェメシュゲゼク族とアクコユンル朝との関係については、*Woods* 1999: 91-2, 187.

6) チェメシュゲゼク族の一部は、アゼルバイジャンやコーカサスになおとどまっていた。ファズリー・ベグ・ファーザーニー・エスファハーニー *Fazli Beyg Khūzāni Eṣfahāni* によれば、アルダビールの西方アングート *Angūt* の知事であったモンズール・ソルターン・チェメシュゲゼク *Monzūr* へ

年、この部族のアミールで、イラン中部のハール Khvār に封土を与えられていたシャー・アリー（コリー）・ハーン Shāh ‘Alī (Qolī) Khān は部族を率いてウズベク族を敗走させ（Eskandar: 533; Jahan: 138-9）、翌年にはヘラート Harāt 方面にも動員されている（Eskandar: 569）。このことから、おそらくは、アッバース1世治世までにはイラン中部に移住してホラーサーン防衛を期待されていたものと思われる。なお、チェメシュゲゼク族の本来の支配家系出身ではなく、ゴラーム出身と思われるこのアミールについては、改めて取り上げる。

## 2 パーザーキー族

15世紀後半からこの部族のアミールであったハーレド・ベグ Khāled Beyg は、マムルーク朝から奪った城をウズン・ハサンに引き渡すなどアクコユンル朝に臣従し、893/1488年までには、同王朝により東アナトリアのチェメシュゲゼクの知事に任じられている（Woods 1979: 3-4; Woods 1999: 92-93, 194）。その後、東へと移動し、サファヴィー朝期にかけて、キーイ Kighī/Kiği, エルジシュ Arjīsh/Erciṣ, アディルジェヴァズ ‘Ādeljevāz/Adilcevaz, エレシュキルト

Alashgerd/Eleşkirt など主にヴァン湖北部で勢力を張っていたとされる（Sharaf 1: 435）。とはいえ、この時期、しばしばビトリスのアミール（シャラフ・ハーン・ビドリースィーの家系）に仕えるなど（Sharaf 1: 329）、東アナトリアにおいて最有力の部族ではなかったようだ<sup>7)</sup>。

サファヴィー朝成立後、アミールのハーレド・ベグ Khāled Beyg は、エスマーイール1世に臣従している。「ある戦闘において勇敢さの印と卓越の証が彼に見られ……、フヌス Khonos/Hūnis とマラズギルト Malāzgerd/Malazgirt とムーシュ Mūsh/Muş のウーフカーン Ūhkān 郡といった地域を分離して加増し、アミール統治領 emārat としてハーレド・ベグとその兄弟たちに与えた（Sharaf 1: 329）」という。加えて、「クルディスタンの大アミール amir ol-omara’-e Kordestān」にも任じられている（Sharaf 1: 435）。あとでも触れるとおり、これは、王朝支配下のクルド系諸部族を束ねることを期待されたと考えられる役職である。ときに反抗的なクルド系諸部族を、同じクルド系のハーレド・ベグを通じて統制することを狙ったものと思われる<sup>8)</sup>。

チャルデラーンの戦いでのサファヴィー朝

↗ Solṭān Chemeshgezекが、1014-5/1605-07年にギャンジャ Ganja 城の包囲に動員されている（Afzal: 416, 417, 458）。さらに、1020/1611-2年には、アングートの統治権が息子アリー・ハーン・ソルターン ‘Alī Khān Solṭān に受け継がれている（Afzal: 598, 893, 1002; Khold: 461）。このほか、ファズリー・ベグは、アッバース1世治世にチョフル・サアド Chokhūr-e Sa’ad 地方においてチェメシュゲゼク族を率いるアミールを二人挙げている（Afzal: 1003）。また、サファヴィー朝末期に作成された行政便覧には、シールヴァーン Shīrvān 総督の配下にチェメシュゲゼク族とアードグダーシュ Āghdash（シャマーヒー Shamākhi の西）の知事がいたことが記されている（Tadhkirat: 102; Alqab: 78）。

7) ハーレド・ベグの父シャーサヴァール・ベグ Shāhsavār Beyg が、ビトリスのアミール率いるロウジャキ Rowzhaki 部族連合を構成するベルバースィー Belbāsi 族の支配家系と婚姻関係を結んでいたことも、ビトリスのアミール家に対してハーレド・ベグの家系が格下であったことを物語る（Sharaf 1: 402）。

8) エブル・ソンメズ Ebru Sönmez は、シャー・エスマーイール1世が、弱小部族であったパーザーキー族のハーレド・ベグを意図的に重用したことを指摘している（Sönmez 2012: 90-92）。なお、マムルーク朝もまた、「クルドの筆頭 muqaddam al-Akrād」なる役職において、クルド系諸部族を束ねることを図っていたことが知られる（ウマリー: 119; James 2016: 299-300）。現時点では「クルディスタンの大アミール」職との直接的なつながりを示すことはできないが、互いにばらばらになりがちなクルド系諸部族を統制することを主たる任務とした点で機能的には共通する部分も多かったと考えられ、何らかの関連性があったと思われる。

表1 イラン各地へ移住した主なクルド系諸部族と主要人物〔 〕は、部族の支配家系出身ではなく非クルド系のものをさす

部族集団	主要人物	主な経歴	出典
Chegani	Būdāq Khān	タフマースプのコレチ。後に、チェギヤニー族のアミール位と Khabūshān 知事職を得る。1588-9年、アッバース1世により Mashhad 知事とハサン王子の師傅。同年、王子を担いで謀反を計画、マシュハド知事職を解任されるが、1590-1年からアッバース1世の側に仕える。1595年に Esfarā'en 知事、1598-9年、マシュハド知事。その後も、多数の遠征に参加。	KhT: 674, 885-887; Sharaf: 328; Noqavat 602-3; Molla: 49, 52; Eskandar: 141, 227, 277; 295, 364, 403-4, 407, 414-415, 510, 568; Rowzat 591-4, 613, 615, 660, 664, 665, 746; Afzal, 2, 3, 47, 51; Jahan: 107.
	Hasan 'Ali Solṭān	ブーダーク・ハーンの子。1590-91年、Hamadān 知事。1593年のギーラーン遠征に参加。1595-96年に解任され、Bestām 知事に。1597-8年にウズベク族との戦闘で死。	Eskandar: 434, 515, 533; Jahan: 138; Noqavat, 479.
	Hoseyn 'Ali Solṭān	ブーダーク・ハーンの子。アッバース一世の近習に。謀反の罪により1590年に処刑。	KhT: 921; Molla, 106; Eskandar: 402, 433; Afzal: 96.
	Beyrām 'Ali Solṭān	ブーダーク・ハーンの子。1597-8年、戦死した兄ハサン・アリー・ソルターンに代わり Bestām と Dāmghān 知事。	Eskandar: 533; Afzal: 264; Jahan: 139;
	Yūsuf 'Ali Khān	ブーダーク・ハーンの子。1599年、Mashhad 知事、1602年、Marūchaq 知事。	Molla: 185, 229-30; Afzal, 293.
	Safar Qoli Beyg	アッバース1世のコレチ。Harāt (1598-99年) やアゼルバイジャン方面 (1604-5, 1609-11年) での戦闘にチェギヤニー族のコレチあるいは銃兵を率いて従軍。	Molla: 395, 400-408; Eskandar: 656, 797, 798, 808; Afzal: 264, 520, 521, 533.
	'Ashūr Khān	アッバース1世の「弓の近習 yasāvol-e qor」。1632年、Marv 知事。	Molla 400; Eskandar: 1008; Zeyl, 21, 28, 102; Siyar, 131; Jahan: 244, Khold: 25, 123.
	Jāmi Solṭān	アッバース1世の銃兵から、1617-8年、Sabzavār 知事	Afzal, 769.
	Aḥmad Solṭān	ジャーミー・ソルターンの子。アッバース1世の訓育を受けた後、1628-9年までに Sabzavār 知事。1632-3年までに解任。	Eskandar: 1086; Zeyl: 22; Afzal: 860, 861; Khold, 27, 125
	Moḥammad Solṭān	ジャーミー・ソルターンの子。アッバース1世の訓育を受けた後、1637年までに Sabzavār 知事。1648-9年に Zamindāvār のアミール。	Afzal: 861; Siyar: 249; Qesas, 424; Jahan: 283; Khold, 256, 476; Soltani: 255.
Siyāh Maṣṣūr	Khalil Khān	1552-3年、ハーンの称号を授与され、クルディスターンの大アミールに。その後、Khvār を与えられ、さらにホラーサーン防衛に。1564-5にカザーク・ハーン・テケル討伐に動員される。タフマースプの治世末期にはアゼルバイジャンの Sojās および Sūrlūgh 知事に。	Sharaf 1: 323-324; KhT: 448.
	Dowlatyār Khān	ハリール・ハーンの子。ハムゼ王子にコレチとして仕え、モハンマド・ホダーバンデによりシヤーフ・マンスール族のアミールとして Zanjan 周辺に所領を得、対オスマン防衛。ハムゼ王子の死後、反旗を翻し、1590年に改めてアッバース1世に臣従し、Abhar, Soltāniye, Sūrlūgh などの統治権を安堵されるが、結局、1591-2年、アッバース1世により処刑。	Kholasat: 894-5; Sharaf 1: 324-6; Noqavat: 332; Eskandar: 335, 440-1, Afzal: 96-8.
	Sekandar Solṭān	1601-2年、Mināb と Manūjān 知事として、アッラーフヴェルディー・ハーンのもとで Lār 遠征に従軍	Afzal: 305.
	Ommat Beg	1617-8年の時点で式部官 ishik-aqāsī。1619-20年までに Farahābād の警察長官 dārūghe。	Eskandar: 946; Afzal: 771, 843, 875.
	Mirzā Qolī Solṭān	1621-2年までに Bost と Gereshk 知事。	Eskandar: 972; Afzal: 813, 823.
	Rezā Qoli Solṭān	アッバース1世末期までに Bost 知事。	Eskandar: 1086.
	Morād Khān Beyg	1633-4年の時点で式部官	Jahan: 262.
	Mahdi Qoli Solṭān	1647年のヘラート遠征に参加。1653-4年までに Bost 知事、同年解任。	Qesas: 334, 343, 353
	Emām Qoli Solṭān	アッバース1世末期までに Esfarā'en 知事。Mahdi Qoli Solṭān の解任を受け、1653-4年 Bost 知事に任じられるが、着任前にホスト城はムガル朝の支配下に。	Eskandar: 1086; Jahan: 466-7, 542; Khold: 462, 515.
	Moḥammad Zamān Khān	先鋒隊長 charkhchibashi から、1711年、Farāh 知事に。1718年の時点で、Sabzavār 知事。	Badaye: 108; Khatunabadi: 564.
	Habil Khān	1724年までに Esfarā'en 知事。	Mohsen: 181.
Chemeshgezek	[Shāh 'Ali (Qoli) Khān]	非クルド系、王のゴラーム、1598年頃、ウズベク族に対する防衛戦で活躍。1602-3年、チュメシゲゼク族のアミールと Dorūn 知事。	Molla: 239; Eskandar: 533, 569, 631; Jahan: 138, 152.
	[Salim Beyg]	非クルド系、王のゴラーム、アッバース1世治世において Marv 周辺でチュメシゲゼク族を率いる。	Afzal: 1006.
	[Yūsuf Solṭān]	非クルド系、王のゴラーム、1635-6年あるいは1636-7年、チュメシゲゼク族のアミールと Khabūshān 知事。	Eskandar: 1088; Siyar: 249; Khold: 256; Soltani: 255.
	[Otār Khān]	非クルド系、王のゴラーム、1648-9年時点でチュメシゲゼク族知事	Khold: 467.
	Monzūr Solṭān	1605-6年の時点で、Anghūt 知事	Afzal, 416.
	'Ali Khān Solṭān Shaqāqi	モンズール・ソルターンの子。1610-1年から1620-1年まで、Anghūt 知事	Afzal: 807, 873, 893; Khold: 461.
Pazūki	[Shāh Qoli Khān]	非クルド系、1597-8年の時点で Semnān と Khvār 知事として、バーズーキー族を率いて対ウズベク戦に参加。上記シャーフ・アリー (コリー)・ハーンと同一人物か。	Afzal: 235.
	[Khosrow Solṭān]	非クルド系、王のゴラーム。バーズーキー族の百人隊長 yūzbāshi を経て、1607-8年、Semnān と Khvār 知事。1609-10年、マフムディー族討伐に参加。1622-3年頃、Zamindāvār 遠征。	Molla: 401-2, 405, 408, 440; Eskandar: 973, 975, 976, 1088; Afzal: 463, 509, 523, 701, 802, 824.



	[Oṭār Solṭān]	非クルド系、上記オタル・ハーンと同一人物。おそらくホスロウ・ハーンの後を受けて、1638-9年までパーズーキー族のアミールにして、SemnānとKhvār知事。	Eskandar: 1089; Afzal: 1006; Jahan: 231; Khold: 296.
	[Manūchehr Khān]	非クルド系、王のゴラーム。1638-9年にオタル・ハーン解任により SemnānとKhvār知事。	Jahan: 299; Khold: 296.
	[Jamshīd Khān]	非クルド系、王のゴラーム。遅くとも1057/1647-8年から1066/1655-6年までパーズーキー族とSemnānとKhvār知事。	Qesas: 343; Jahan: 467, 594, 595, 612, 706, 742, 751; Khold: 461, 570, 577, 591.
	[Mortazā Qolī Khān Sa'dlū]	非クルド系、サアドルー族。1662-3年、パーズーキー族の統治権とSemnānとDamāvand知事。	Jahan: 742, 751.
Zangane	Qanbar Solṭān	1010/1601-2年までにDashtestān知事、その後、1603年1月にShamilとMināb知事。	Molla: 236; Afzal: 305, 395.
	Shahbāz Solṭān	タフマースプ時代にOrūmiyye知事か、1626-7年、バグダード包囲に動員。1629-30年、モクリー族のコバード・ハーンQobād Khānの息子討伐に動員。	Rowzat: 898; Dheyli: 195; Afzal: 823; Siyar: 98, 243; Jahan: 227, 231; Khold: 245; Afshar: 13.
	Jānbāz Solṭān	上記シャフバズの子。1636年、アルダラーン総督でサフィー1世に反旗を翻していたハーン・アフマド・ハーンKhān Ahmad Khānがモースルで死去したとの報を宮廷に上奏。	Dheyli: 195; Siyar: 243; Khold: 245.
	'Alī Khān Solṭān	もともとギャンジュ・アリー・ズィークの家臣であったが、1617-8年、スルタン位とともにTorshiz知事に。1625-6年までに解任、ハサン・ハーン・オスタージャルーHasan Khān Ostājālūの従者に。1631-2年までにKhvāf知事。	Afzal: 769, 770, 948, 949; Siyar: 120; Khold: 103.
	'Alī Bālī Beyg	シャフバズの兄弟。ファルハド・ハーン・カラマーンルーFarhād Khān Qarāmānlūの従者を経て、アッパース1世の宮廷で訓育を受け、手網持ちjelowdārとなる。アルダラーン総督ハル・ハーンHalū Khān討伐に功績を挙げる。1618-9年、主馬頭amirākhorbāshīに。	Molla: 245; Eskandar: 942; Dheyli: 149, 273; Afzal: 823; Siyar: 86, 96, 120, 235, 264; Jahan: 199, 317; Khold: 206, 239, 335; Sharif: 21-23; Hronika: 20a-20b; Masture: 29-30; Hadiq: 28, 137; Tohfe: 104.
	Shāhrokh Solṭān	アリー・バーラーの子。1630年、Khvāf知事、父の死後、後を継いで1634-5年、主馬頭、1637-8年、SonqorとKalhor族知事。	Zeyl: 227, 246, 273; Siyar: 96, 250, 286; Jahan: 231, 263, 294, 301, 331; Khold: 206, 282, 303, 335, 357.
	Sheykh 'Alī Khān	アリー・バーラーの子。1638年、兄シャーロフの後を襲い主馬頭、1639-40年、同じく兄シャーロフの後を襲いKalhor, Sonqor, Kermānshāh知事に。1666年、ホラーサーン方面軍司令官、1668年、銃兵隊長、1669年、大宰相。	Zeyl: 228, 246, 273; Siyar: 264, 286; Qesas: 15, 20, 21, 264; Jahan: 264, 286, 331, 569, 577, 626; Khold: 282, 303, 335, 535, 542, 593.
	Najaf Qolī Beyg	アリー・バーラーの子。1639-40年、兄シェイフ・アリーの後を襲って主馬頭。	Siyar: 286; Qesas, 449, 451-2; Jahan: 301, 317, 504, 505, 602; Khold: 303, 335, 482, 484, 486, 562; Nasrabadi: 36.
	Sevenduk Solṭān	1631年、バフレインBahreyn知事。	Siyar: 148; Jahan: 250; Khold: 150, 159.
	Dūst 'Alī Khān	アリー・バーラーの甥。1634-5年、主馬頭に。1640-1年、Marūchaq統治権、1648-9年、Bost知事。	Siyar: 291; Qesas: 292, 423; Jahan: 263, 305, 495; Khold: 206, 311, 476; Soltani: 259; Shahriyaran: 214.
	Hoseyn 'Alī Khān	1666年、Kermānshāh知事、1675-75年、KūhgīlūyeとBehbahānの知事、1692年以前に主馬頭。	Farsname: 488.
	Shāh Qolī Khān	シェイフ・アリー・ハーンの子。1682-91年と1700-7年、コルチ長官(ケルマーンシャー知事も兼任)、1707-15年、大宰相。	Hedge: 216; Khatunabadi: 548; Bardsiri: 626; Shahriyaran: 129; Alqab: 7, 12, 37.
	Mortazā Qolī Beyg	シャー・コリーの子。1695-6年までKermānshāh知事代理。	Shahriyaran: 124, 129, 133.
	Sheykh 'Alī Khān II	シャー・コリーの子。鷹匠頭mir-shekār bāshīから、1720年、コルチ長官。	Alqab: 12; Occupation: 36, 184.
	Mohr 'Alī Beyg	1695-6年、Kermānshāh知事代理。	Shahriyaran: 133, 134
	Moḥammad Rafī' Beyg	1693-5年、手網持ちから百人隊長に。	Shahriyaran: 58.
	Rostam Khān	1697-8年までにKhvāfとJāmの知事。同年、オスマン朝使節に。	Shahriyaran: 130, 213, 269.
	'Abd al-Bāqī Khān	1722年の時点でKūhgīlūye知事、Kermānshāh知事	Badaye: 15
	Eshāq Khān	銃兵隊長を経て、1724年、Kūhgīlūye知事	Badaye: 27; Occupation: 176.
Zik	Ganj 'Alī Khān	ヘラート時代からアッパース王子の側近、モルシェド・コリー・ハーンのコラーゼム、1585-6年、KhvāfとBākharzの知事職、1589-90年、Save知事。1593-4年、Kermān知事。1621-22年、Qandahār知事。	KhT: 1047-8, 1083; Ehya: 446, 680, 732; Eskandar: 414, 977-8, 1041; Zeyl: 131; Afzal: 64, 73, 359; Jahan: 204, 215; Khold: 89, 363;
	'Alī Mardān Khān	ギャンジュ・アリーの子。父の死後、Qandahār知事、後、ムガル朝に亡命。	Eskandar: 1041, 1086; Zeyl: 293; Jahan: 327, 357, 762, 763.
	Shāh Qolī Beyg	ギャンジュ・アリーの親族。1596-70年時点でBam知事。1613-4年にアーディルシャー'Adelshāh朝に使節として派遣されるが、実現せず。	Ehya: 377; Eskandar: 866; Jahan: 183.

敗北を受け、ハーレド・ベグはセリム1世に帰順しようとしたが、結局死罪に処せられている。息子オヴェイス・ベグ Oveys Beyg はサファヴィー朝に仕え、タフマースブによってエレシュキルトを安堵されている。その息子ケリージュ・ベグ Qelij Beyg は、エレシュキルトからはやや離れたコーカサス地方のザガム Zagam の統治権などを与えられたが(山口 2007: 91, 108), 966/1559年頃には、同じアミール族のヤードガール・ベグ Yādgār Beyg がエレシュキルトやキャウズマン Qāghazmān/Kağızman を統治していた(Sharaf 1: 331-332; Takmelat: 114)。

その後も、ケリージュ・ベグが改めてエレシュキルト知事に任じられるなど、パーズキー族はこの地を本拠地としてサファヴィー朝に仕えていたが、タフマースブ死後に始まったオスマン朝との戦闘でエレシュキルトが荒廃に帰すと、部族は散り散りになった。アミールのケリージュ・ベグは、チョフーレ・サアド総督のモハンマディー・ハーン・トクマーク・オスタージャルー Moḥammadi Khān Toqmāq Ostājālū の配下に入ってナフチェヴァーンあたりにあったが、彼もまた 993/1585-6年のオスマン朝との戦闘により命を落とす。遺児エマーム・コリー・ベグ Emām Qolī Beyg は、はじめアルダビール知事ゾルフエカール・ハーン・カラマーンルー Zū al-Feqār Khān Qaramānlū の配下に入るが、最終的にアッバース1世によってコルチとして召し抱えられている(Sharaf 1: 333-334)。1012/1603年、アッバース1世がオスマン朝からエレヴァンを奪い返そうと向かった際に、この地域にあったパーズキー族がアッバースの御前にはせ参じたことも知られている(Eskandar: 644; Kütükoğlu 1993: 264)。こうしたことから、パーズキー

族の一部はコーカサス付近になお残っていたとはいえ、エレシュキルトの所領は失うことになったと考えられる<sup>9)</sup>。以上のように、パーズキー族の場合には、他の「イランのクルド」とは異なり、タフマースブ治世においては、概ね現在のトルコ東部からコーカサスにかけて居住しており、大きな移動をとまなう強制移住の対象にはなっていなかったが、タフマースブ死後のオスマン朝との紛争の中で世襲の所領を失っていったのである。

### 3 チェギャニー族

もともとアクコユン朝7代君主ヤクーブ Ya'qūb (在位 1478-90) に仕えていたと思われるが(Amini 1: 147, 157; Amini 2: 140, 148; Woods 1979: 2-3; Woods 1999: 188), 遅くとも 933/1526-7年までにはサファヴィー朝に服属している(KhT: 201; Eskandar: 48)。しかし、アミールが任命されなくなって<sup>10)</sup> 統制を失ったチェギャニー族は各地で交易路を襲うようになった。タフマースブがチェギャニー族の殺害と国外追放を命じると、部族の一部はインド方面に逃げ、その途上で、ヘラート知事カザーク・ハーン・テケルー Qazāq Khān Tekelū に拾われている。カザーク・ハーンが 972/1564-5年にタフマースブの命で討伐されると、チェギャニー族は、さらに東、現アフガニスタンのガルジェスターン Gharjestān 地方へと向かった。ここでタフマースブは、この部族のアミール家系出身で、当時、王のコルチとなっていたブーダーク・ベグ Būdāq Beyg をアミールとしてチェギャニー族のもとへ送り、ウズベク族から奪取したばかりのホラーサーン地方のクーチヤーン Qūchān (ハブーシャーン Khabūshān) を与えたという(山口 2007: 91)<sup>11)</sup>。この人物は、タフマースブ

9) 実際、まもなくオスマン朝の支配下に入っている(Sharaf 1: 334, 447)。

10) 事実、チェギャニー族のアミールが史料上確認できるのは、後に述べるブーダーク・ハーン以降であり、おそらくサファヴィー朝に服属した時点で、アミールは任命されていなかったものと思われる。

11) ただし、ファズリー・ベグによれば、すでに 935/1528-9年の時点で、チェギャニー族はハブー

時代末期の各地の知事を記した一覧表にも挙がっており、986/1578-9年にエスマーイール2世 Esmā'il II (在位 1576-78) 死後の混乱に乗じてホラーサーンを侵そうとするウズベク族を討つべく集められた軍勢にも加わっている (KhT: 673-4; Sharaf: 328; Molla: 49, 52; Eskandar: 141, 227)。あとで触れるとおり、彼はアッパース1世治世においても重要な役割を演じることになる。

#### 4 スィヤーフ・マンスール族

この部族はもともとイラク北部にあったと推測される。経緯は不明だが、アミールのハリール・ベグ Khalil Beyg がタフマースブに取り立てられ、960/1552-3年にハーンの称号と「イランの全クルドの大アミール職 amīr al-omarā'i-ye jomle-ye Akrād dar Iran」を付与されている (山口 2007: 90-91)。ハーンの称号は、サファヴィー朝の軍人に与えられた最高位の称号であり、当時、クルド系アミールでこの称号を与えられていたのがごくわずかであったことを考えると、タフマースブの重用ぶりがわかる。「イランの全クルドの大アミール」という職は、かつてハーレド・ベグ・パーズキーに与えられた「クルディスタンの大アミール」に相当するものであろう。

ハリール・ハーンは当時のイランにあって最も重要な交易路の一つであったカズヴィーンからタブリーズあたりの交易路の治安維持にあたるよう命じられる。ところが、まもなくスィヤーフ・マンスール族みずから商人を襲うようになったため、タフマースブはハリール・ハーンを解任し、ハールに所領を与えホラーサーン防衛に任じている。972/1564-5年には、上記カザーク・ハー

ン・テケルー討伐にも動員されている (山口 2007: 90-91, 101-102)。

#### 5 ザンギャネ族

もともとイラク北部にあったザンギャネ族は、エスマーイール1世時代にサファヴィー朝に臣従したとされるが、部族全体を統率するアミールが任命されず、より小規模の集団に分けられ、王のコルチに登用されるか、あるいはキズィルバーシュを構成するトルコ系諸部族の配下に組み込まれていった (山口 2007: 91)。しかし、16世紀を通じて、この部族の出身で史料に名が残るような地位を占めるものはいなかった。

#### 6 ズィーク族

アッパース1世治世以前において、この部族についての情報はほとんどない<sup>12)</sup>。しかし、表1にあるように、ズィーク族の部族出身者が16世紀末以降にイラン東部各地の知事職に任じられていることから、それ以前のある時点でイラン東部に移住させられたと思われるが、その経緯は不明である。

以上のように、16世紀後半以降、ホラーサーンやペルシア湾で統治権を与えられるクルド系諸部族の多くがタフマースブ時代にホラーサーン防衛のために移住させられたものたちであることが確認できた。しかも、その多くが東アナトリアやイラクなどから何らかの事情によりサファヴィー朝領内に移住してきたものたちであった。他方、「イランのクルド」の中でも特に東アナトリアにあった諸部族は、サファヴィー朝以前からアククン朝に臣従していたことも確認された<sup>13)</sup>。サ

↗ シャーンを管理していたとされ (Abrahams: 179)、これが事実であれば、タフマースブ治世のごく初期までにホラーサーン方面に移住していたことになる。たしかに、タフマースブによる討伐を受けてインドへと逃亡したことを考えると、討伐以前にホラーサーン付近にあったと考える方が自然かもしれない。

12) Qāzī Aḥmad Qomī, *Kholasat al-Tavarikh* のベルリン写本では、936/1529-30年に行われたタフマースブによる閲兵式に、チェギャニー族など他のクルド系諸部族と一緒に、ズィーク族も参加したと伝えている (KhT: 943)。Röhrborn 1966: 46も参照のこと。

ファヴィー朝に仕える以前からすでにトルコ系王朝に臣従するという経験をもっていたのである。

## II 「イランのクルド」の意味するところ

### 1 シャラフ・ハーン・ビドリシーの意図

表1に挙げた諸部族のうち、ズィーク族をのぞく諸部族は、いずれも『シャラフの書』のなかで「イランのクルド」と総称されている。逆に、以下に詳述するように、「イランのクルド」の重立ったものが表1に含まれており、両者はほぼ重なると言ってもよい<sup>14)</sup>。なぜシャラフ・ハーンは彼らを「イランのクルド」と呼んだのであろうか。そもそも、サファヴィー朝の支配を受け入れたクルド系諸部族は、これら「イランのクルド」にとどまらない。アルダラーン *Ardalān*、モクリー *Mokri*、ドンボリー *Donboli*、マフムディー *Mahmūdi* などの諸部族もサファヴィー朝と深いつながりをもった(山口 2007: 92-93, 95-98)。彼らと「イランのクルド」との違いは、いったいどこにあるのであろうか。

考えられる理由の一つは、『シャラフの書』の一部を英訳したメフルダード・イーザディー *Mehrdad Izady* が指摘するように、1590年のサファヴィー朝とオスマン朝との和平協定により、1597年とされる『シャラフの書』執筆時点においてクルド地域のほぼ全領域がオスマン朝の支配下に入っていたことであろう(Sharaf 2: 24)。タフマースブの後を継いだエスマーイール2世やモハンマド・ホダーバンデ *Moḥammad Khodābande* (在位 1578-87)の時代は、キズィルバーシュ諸部族が主導権をめぐって相争う内乱の時代であり、対外的にもオスマン朝やウズベク族

の侵入を招くことになった。サファヴィー朝に服属していたクルド系諸部族の中にもオスマン朝に寝返るものもあった。1587年に即位したアッバース1世は、ウズベク族との戦闘を優先して、いったんオスマン朝と和平を結んだ。これが、上記の和平協定、いわゆるイスタンブル協定である(Kütükoğlu 1993: 197)。これにより、サファヴィー朝は、アゼルバイジャンを含む西部の領土の大半をオスマン朝に割譲することを余儀なくされた。こうして、クルディスタンのほぼ全域がオスマン朝の版図に組み入れられ、アルダラーン、モクリー、マフムディーなどの有力クルド系諸部族も、オスマン朝に(名目的であれ)帰服した。サファヴィー朝には、イラン中部や東部など各地に散らばるクルド系諸部族が服属するばかりとなったため、シャラフ・ハーンもそうした事態を受けて彼らのことを「イランのクルド」と呼んだというわけである。

しかし、諸史料を子細に検証すると、以下に見るとおり、「イランのクルド」には、単にオスマン朝の支配下に入らなかったということ以上に、いくつかの興味深い共通項があり、そのことが、他のクルド系部族とは異なり、ホラーサーンなど東部に移住させられたり、後にイラン各地や中央政界で活躍したりすることにつながっていったと思われる。

この点に関し、ヴァルター・ポシュ *Walter Posch* は興味深い指摘をしている。彼によれば、ドンボリー族、アルダラーン族、モクリー族などとは異なり、「イランのクルド」は、クルド系のなかでもサファヴィー朝にとってとくに信頼できる部族であり、コルチに登用され、場合によってはサファヴィー教団に加わるものがあったという点で、完全にキズィルバーシュに組み込まれていたという

13) サファヴィー朝以前のトルコ系王朝とクルド系諸部族との関係については、Woods 1999: 91-2.

14) 厳密に言えば、チェメシュゲゼク族は、「イランのクルド」にも数え上げられているが(Sharaf 1: 323)、これとは別に「クルディスタンの他のアミールやハーケム」の一つとして比較的详细に紹介されている(Sharaf 1: 162-175)。これは、先にも触れたとおり、この部族は結局オスマン朝側についており、一部のみがサファヴィー朝側に残ったためと思われる。

(Posch 2003: 210)。傾聴に値する指摘ではあるが、残念ながらこれ以上の分析は試みていない<sup>15)</sup>。

さて、「共通項」について検証する前に、まずは「イランのクルド」についてのシャラフ・ハーン自身の解説を見ておこう。

はじめに確認しておくべきは、『シャラフの書』全体のなかで「イランのクルド」にさかれた紙数のごく限られていることである<sup>16)</sup>。もっとも一般的な、ヴラディミール・ヴェリアミノフ＝ゼルノフ Vladimir Veliaminof-Zernof による校訂版 (Sharaf 1) にしたがえば、クルド系諸侯の事績を論じた第1部 459 ページのうち、「イランのクルド」にあてられているのは12 ページほどに過ぎない。長短さまざまとは言え、他の有力諸侯については、それぞれ数ページが割かれているのに対し、「イランのクルド」とされた諸部族については、おのおの数行からせいぜい1-2 ページがあてられているだけである。また、著者シャラフ・ハーンの一族についてのかかなり詳細な記述が第1部末尾にあるのをべつとすれば、「イランのクルド」はクルド系諸侯の説明の最後におかれている。要するに、その扱いは明らかに軽い。これらの事実を念頭に置きつつ、具体的な記述を見ていこう。

まず、「イランのクルド」について、シャラフ・ハーンは以下のように紹介する。

イランのクルドの主なものは、スィヤーフ・マンスール、チェギヤニー、ザンギヤネの3つの種族 *tabaqe* である。伝説が知られており、巷間では以下のように語られている。もともと彼らは3人の兄弟であった。ロレスターン Lorestān, また別の伝承によれば、グーラーン Gūrān やアルダラーンからイランの王 *salāṭin-e Īrān* に仕えるために故郷を出、すっかり出世して、3人ともアミールの地位に到達し、周辺から彼らの旗の下に集まったものたちを自らの名にちなんで呼んだ。アミールやソルターンたちに仕えている<sup>17)</sup> イランのクルドの他の諸部族の名前は、以下の通りである。ラク Lak, ザンド Zand, ルーズベハーン Rūzbehān, マティエラジュ Matilaj (?), ハスィーリー Haṣīrī (?), シャフRezūlī, マズィヤール Maziyār (?), コラーニー Kolānī, アミーンルー Amīnlū, マムルーイー Mamlū'ī, ケジュ Kej (?), ゴラーニー Gorānī, ザクティエ Zaktī (?), ケッレギール Kelle-gīr, パーザーキー, ヘイ Hey, チェメシュゲゼク, アラブギールルー 'Arabgīrlū などである<sup>18)</sup>。中でも、パーザーキー, チェメシュゲゼク, アラブギールルー, ヘイの4つの種族は古くから彼らの間にはミールやミールザーデがおり、世襲的に部族を統率し、所領を

15) ただし、ドンボリー族、マフムディー族、ロウジャキー Rowzhakī 族 (ビトリスのアミール率いる部族連合) など、シャラフ・ハーンが「イランのクルド」に分類していないクルド系諸部族のなかからもコルチとして重用されるものがあつたことから、ポシュの指摘はかならずしも正確ではない (山口 2007: 100-101; Yamaguchi 2012: 117-118)。

16) 『シャラフの書』の構成については、Sharaf 1: 8-11; Sharaf 2: 18-27 を参照のこと。

17) アミールやソルターンといった称号をもつ、他の部族長の配下に入っていたことを指しているものと思われる。

18) パーザーキー, チェメシュゲゼク, アラブギールルーを除けば、ここに「イランのクルドの他の諸部族」として列挙された諸部族の多くは、『シャラフの書』の中でもこの箇所でのみ言及されており、また、一部を除き、他の同時代史料でも確認できない。管見の限り、他の史料で確認できるのは、ラク族, コラーニー族, ケッレギール族の3つである。ラクは、サルマース Salmās やゾハーブ Zohāb 付近に確認できる (Eskandar: 1000; Afzal: 1002; Jahan: 214)。コラーニー族については、アッパースの治世末期にはザンジャン Zanjān の知事職を得ている (Eskandar: 1087)。ケッレギール (あるいはグーレギール Gūle-gīr) については、同じくアゼルバイジャン地方にあつたことがわかる (Eskandar: 1087; Afzal: 1002)。これらの部族についても、大幅な移住は行われなかつたようだ。なお、アラブギールルー族については、アッパース1世治世末期にはアゼルバイジャン地方にあって、トルコ系のシャームルー Shāmlū 族の配下に入っていたようだ (Eskandar: 1084)。

統治している。そして、別の24のクルドの諸集団がイランのカラバーク *Qarābāgh* に居住しており、イルミ・ドルト *İkrmi Dort* として知られている<sup>19)</sup>。……別のクルド系部族がホラーサーンにあり、彼らをキール *Kil* と呼ぶ。……イランにはまだ知られていないクルド系諸部族が多数あり、その理由を挙げることは冗長になるのでひかえておく。

これによれば、「イランのクルド」とは、主にスィヤーフ・マンスール、チェギャニー、ザンギャネの3つの部族を指し、このほかにもパーズキー、チェメシュゲゼク、アラブギールルーなど多くのクルド系諸部族が列挙されている。もちろん、上記の伝説自体は、歴史的事実としてかなり怪しい。とくに、スィヤーフ・マンスール、チェギャニー、ザンギャネの3つを兄弟としているのは、フィクションである。しかし、注意すべきは、かれらが「イランの王」、すなわちサファヴィー朝に忠実に仕えたことがことさらに強調されていることである。

## 2 「イランのクルド」に見られる共通項

以上のことは、かれらの実際の政治行動からも裏付けられる。かつて筆者は、16世紀になってサファヴィー朝やオスマン朝の勢力がクルディスタンに及んでくるなかで、クルド系諸侯がどのようにこれに対応したかについて検証し、彼らを3つのグループに分けた(山口 2007: 89-98; Yamaguchi 2012: 111-114)。第1に、継続的にオスマン朝の支配に服したものの、第2に、ほぼ安定的にサファヴィー朝に臣従したものの、第3に、オスマン朝とサファヴィー朝との間でしばしば臣従対象を変更したものの、である。第2グループは、いくつかの例外を除き「イランのクルド」にほぼ重なる。他方、ドンボリー族、マフムディー族、

モクリー族、アルダラーン族などは、第3グループに分けられる。

第3グループと第2グループ、とくに「イランのクルド」とされた諸部族とを比較すると、「イランのクルド」は、1590年の講和以前から、サファヴィー朝に対して相対的に従順であった。ホラーサーンへの移住などに対しても、大きな抵抗は示さなかったようだ。これに対し、イランとオスマン朝の国境にあってサファヴィー朝による支配にときに根強い抵抗を示した第3グループのクルド系諸部族は、必ずしもサファヴィー朝君主に対して忠実ではなく、状況に応じてオスマン朝とサファヴィー朝との間で臣従を変更した。

こうした違いは、何に由来するのであろうか。背景の一つとして指摘できるのは、「イランのクルド」が、比較的弱小であったこと、あるいは、ときにアミールを失っていたことである。このことは、上の『シャラフの書』からの引用の中で、「アミールやソルターンたちに仕えているイランのクルドの他の諸部族」、つまり、アミールやソルターンといった称号をもち、より有力な、おそらくはキズィルバーシュを構成するトルコ系部族の配下に入っていたものが多く挙げられていることからわかる。また、第1章で確認したように、「イランのクルド」のなかで特筆されているスィヤーフ・マンスール、チェギャニー、ザンギャネ、チェメシュゲゼクなども、サファヴィー朝に服従した時点で明確な世襲的所領をもたないか、あるいは奪われており、ザンギャネ族については、明らかにキズィルバーシュ諸部族に仕えていた。こうした事情から、比較的容易にサファヴィー朝の支配を受け入れたものと思われる。この点、アルダラーン、モクリー、ドンボリー、マフムディーなどが世襲的な所領をもち、その維持に並々ならぬ執念を見せたのとは対照的である。『シャラフの書』での「イランのクルド」の扱いが

19) トルコ語で「24」を意味するこの部族は、17世紀に編まれたサファヴィー朝の年代記では、カージャール *Qājār* 族の一部とされている (Eskandar: 1085; Khold: 301)。

小さいのも、かれらが相対的に弱小であったことを示唆している。

もう一つ指摘すべきは、「イランのクルド」すべてに当てはまるかどうかは確認できないが、すでに述べたように、チェメシュゲゼク族、パーズーキー族、チェギャニー族などは、サファヴィー朝以前にトルコ系のアクユンル朝に仕えていたことである。こうしたことも、彼らが同じトルコ系のサファヴィー朝に比較的スムーズに服従するのを促すことになったと思われる。

ところで、サファヴィー朝にとって、ホラーサーン防衛への活用のほかにも、彼らの忠誠には利用価値があった。先に挙げた「クルディスタンの大アミール」や「イランの全クルドの大アミール」という称号は、この点で興味深い。別稿で論じたように（山口 2007: 101; Yamaguchi 2012: 118-9）、この職自体は実質的な意味をもったものではなかったと思われるが、サファヴィー朝としては、忠実な「イランのクルド」を通じて他の、必ずしも従順ではないクルド系諸部族を統制することを意図したものと考えられよう。

このことは、『シャラフの書』の著者シャラフ・ハーン自身、エスマーイール2世によってこの職に任じられていることから裏付けられる。かれの父シャムス・アッディーン Shams al-Din は、オスマン朝によってビトリスの統治権を剥奪されてタフマースブの宮廷に亡命し、シャラフ・ハーン自身はイランで生まれ宮廷で養育を受け、長じてはタフマースブに忠実に仕えていた（山口 2007: 99-101）<sup>20)</sup>。彼の一族もまた、サファヴィー朝にある限り明確な世襲の所領をもたず、一定の役職を与えられることでサファヴィー朝に依存していたのであった。シャラフ・ハーンは、自らが率いるロウジャキー族を「イラ

ンのクルド」とは呼んでいないが、両者には明らかに共通点があったのである。

以上のように、「イランのクルド」とは、たまたまイスタンブール条約のあとにサファヴィー朝側に残っていたクルド系諸部族を指すというよりも、むしろ、ポシュの言うように、サファヴィー朝に忠実と見なされたクルド系諸部族を指していたと考えるべきであろう。その特徴として、何らかの理由で東アナトリアやイラクから移住してサファヴィー朝に仕えたことにくわえ、比較的弱小であり、確たる本拠地をもたなかったこと、それゆえに他のクルド系諸部族に比して高い移動性をもっていたことが指摘できる。チェギャニー族がインド方面へと逃げようとしたことは、このことを象徴している。また、このように土着性が相対的に薄いことが、サファヴィー朝にとっても好都合であったにちがいない、それ故にこそ、彼らはホラーサーンなどへの移住政策の対象となったと考えるべきであろう。この点、キズィルバーシュ諸部族を構成するトルコ系諸部族とも共通する性格をもっていたのである<sup>21)</sup>。逆に言えば、サファヴィー朝といえども、モクリー族やアルダラーン族など強力で、規模が大きく、世襲の所領に執着するクルド系諸部族を強制的に移住させることはそう容易ではなかったのである。

### III 辺境防衛から宮廷エリートへ

#### 1 移住先での在地化

では、こうして移住させられた「イランのクルド」はその後、サファヴィー国家の支配体制変容のなかでどのような役割を果たしていったのだろうか。

第一に言えるのは、彼らがそれぞれの移住先においてある程度土着化していったことで

20) ただし、『シャラフの書』の著者シャラフ・ハーンは、938/1531-32年、タフマースブに仕えた際にビトリスの統治権を安堵された上に「クルディスタンの大アミール職」を得ている（山口 2007: 101; Yamaguchi 2012: 118）。

21) キズィルバーシュの機動性について、特にコーカサスとの関係では、前田 2009: 178-184。

ある。もっとも興味深いのは、ハブーシャーン知事に任じられていたブーダーク・ハーン・チェギヤニーの事例である<sup>22)</sup>。彼は移住後まもなくホラーサーンの有力アミールの一人名になっていったと考えられ、この地域にあったキズィルバシュの有力アミールとも手を結んでいたことが史料からわかる。エスマーイール2世治世末期からモハンマド・ホダーバンデ治世初期の985/1577-8年にウズベク族のジャラル・ハーン Jalāl Khān がホラーサーンに侵入した際にこれを撃退しようとしたマシュハド知事モルタザー・コリー・ハーン・ポルナーク・トルキヤマン Mortazāqoli Khān Pornāk-e Torkamān が最初に召集を呼びかけたアミールのうちの1人が、ブーダーク・ハーンであった (KhT: 673-4; Eskandar: 228-230, 256; Rowzat: 591-4)。また、989/1581-2年、ニーシャープール Nishāpūr においてホラーサーンの君主としてアッバース王子を絨毯 farsh に載せて玉座へと運ぶ即位儀礼が行われた際、絨毯の四隅をもった4人のアミールのうちの1人もブーダーク・ハーンであった。他の3名は、ヘラート知事アリー・コリー・ハーン・シャームルー ‘Alī Qoli Khān Shāmlū, ハーフ Khvāf 知事モルシェド・コリー・ハーン・オスタージャルー Morshed Qoli Khān Ostājālū, ズルカドル Zu al-Qadr 族のハーンであった (Rowzat: 613, 615)。つまり、アッバース王子の師傅であったアリー・コリー・ハーンや、それに対抗して後にアッバースを奪って最終的に王位に就けることになるモルシェド・コリー・ハーンと並んで、

ブーダーク・ハーンが関わっていたのである<sup>23)</sup>。

さらに、アリー・コリー・ハーンとの対立が不可避とみたモルシェド・コリー・ハーンは、ブーダーク・ハーンを抱き込むために婚姻関係を結んでいる (Eskandar: 295, 364; Rowzat: 655; Afzal: 2, 3)。そして、アッバースをめぐるモルシェド・コリー・ハーンとアリー・コリー・ハーンが994/1585-6年に衝突した際に、モルシェド・コリー・ハーン軍の右翼を任されたのが、ブーダーク・ハーンやその息子たちであった (Rowzat: 660)。この結果、翌年には、ハブーシャーンが改めてブーダーク・ハーンに安堵されている (Rowzat: 664-665)。これらの事実から、ブーダーク・ハーンがすでにマシュハド地方の有力アミールとしての地位を確立していたことがわかる。

こうして力をつけたブーダーク・ハーンは、アッバース1世即位まもなくの997/1588-9年、アッバース1世の子ハサン王子 Ḥasan Mirzā の師傅とマシュハド知事に任じられている (KhT: 885; Eskandar: 402; Jahan: 107)<sup>24)</sup>。マシュハドはイマーム・レザーの墓廟都市であるとともに、ホラーサーンではヘラートに次ぐ重要な都市であり、ウズベク族との紛争の最前線にあった。この町の統治権を与えられたことは、ブーダーク・ハーンの実力に対する王の評価が高かったことを示していよう。

しかし、まもなくモルシェド・コリー・ハーン・オスタージャルーがアッバースの命で殺害され、彼と関係のあったものまで処罰されるや、ブーダーク・ハーンはハサン王子

22) 彼の統治権はエスマーイール2世やモハンマド・ホダーバンデによっても追認されている (KhT: 674; Molla: 49; Eskandar: 227)。

23) アッバースがホラーサーンの君主として即位する直前、マシュハド知事モルタザー・コリー・ハーン・ポルナークと、アッバースを擁するアリー・コリー・ハーン・シャームルーやモルシェド・コリー・ハーン・オスタージャルーとの間に対立が生じるが、この時、ブーダーク・ハーン・チェギヤニーは、その親族と思われるエスマーイール・ハーン・チェギヤニー Esmā’īl Khān Chegani とともにモルタザー・コリー・ハーンの側につきおり、アリー・コリー・ハーンやモルシェド・コリー・ハーン軍勢とニーシャープール近郊で干戈を交えたが、結局敗走している (Eskandar: 277)。おそらく、この敗走直後に、ブーダーク・ハーンは、アッバース側に寝返ったものと思われる。

24) ファズリー・ベグは、Moḥammad Bāqer 王子であったとしている (Afzal: 47, 51)。



を担いで逃亡し、本拠地ハブーシャーンで「ホラーサーンの大アミール amīr al-omarāʾ-ye Khorāsān」として周辺の諸部族を糾合することを図った (KhT: 887; Eskandar: 403-4, 407)。ところが、ウズベク族の攻撃を受けて、結局アッパースに許しを請うことを余儀なくされている (Eskandar: 414-415; Afzal: 53, 73)。

その後も、ブーダーク・ハーンは重用される。まず、上記事件の直後に数年間、ハマダーン知事職に任命されている (KhT: 886; Afzal: 95)<sup>25)</sup>。その後、1004/1595-6年、ホラーサーン一帯を支配していたウズベク族からエスファラーエン Esfarāʾen を回復すると、その知事に任じられている (Eskandar: 510)。さらに 1006/1598-9年にマシュハドを奪還すると、今度はマシュハド知事に再任されている (Eskandar: 568; Rowzat: 746)。彼がホラーサーン防衛の要とみなされていたことがわかる。

## 2 アッパース 1 世による討伐

もちろん、アッパース 1 世の恩寵を受けたものばかりではなかった。

ハリール・ハーン・スィヤーフ・マンスールの子、ドウラティヤール・ハーン Dowlatiyār Khān は、父の死後、モハンマド・ホダーバンデ治世に、アッパース王子の兄ハムゼ王子 Ḥamze Mīrzā にコルチとして仕えていた。1586年、ハムゼ王子が、反乱を起こしたトルキヤマーン族とテケルー族を討とうとした際に、その配下にあったのがドウラティヤール・ハーンであった。「王子に仕えるコルチであったが、[王子が] スィヤーフ・マンスール族のアミールに任じて、部隊 lashkar の動員のために派遣したところ、

スィヤーフ・マンスール族のクルド人たちの一軍を率いてやってきた」 (Eskandar: 335) と伝えられている。この功績によって、父ハリール・ハーンがかつて統治権をもっていた (Sharaf 1: 325) イラン西北のソルターニーエ Soltāniyye やソジャース Sojās に所領を与えられていた。しかし、この直後におこったハムゼ王子の暗殺後は独立傾向を見せ、即位したアッパースにはいったん服従の姿勢を示したようだが (Noqavat: 332)、結局、1000/1591-2年、アッパースの討伐を受け、降伏してきたところを一族郎党とともに処刑されている (Sharaf 1: 324-6; Eskandar: 440-1; Afzal: 96-7)<sup>26)</sup>。なお、表 1 にあるように、スィヤーフ・マンスール族の一部はホラーサーンに残り、知事職などを得ている。

## 3 ホラーサーンから他の辺境へ

当初、クルド系諸部族が知事職を与えられたのはホラーサーン方面中心であったが、その後、他の地域の知事職を与えられるものも現れた。その代表例が、ケルマーン Kermān 知事に任じられた、ズィーク族のギャンジュ・アリー・ハーン Ganj ʿAlī Khān であった。

もともとモルシェド・コリー・ハーン・オスタージャールの家臣であった (Ehya: 680; Afzal: 64, 73) ギャンジュ・アリーは、幼くしてヘラート総督となっていたアッパース王子に仕え、ウズベク族との戦闘で手柄を立てていた (Eskandar: 1041)。モハンマド・ホダーバンデ治世の 994/1585-6年には、ハーンの称号とともに、ハーフとバーハルズ Bākharz の統治権を与えられている (KhT: 1047-8)。998/1589-90年頃には、ウズベク族の侵攻の前にホラーサーン各地が陥落する

25) ただし、エスキヤンダル・ベグによれば、ハマダーン知事に任じられたのは、ブーダーク・ハーンの子ハサン・アリー・ハーンであり、ブーダーク・ハーンは他の息子たちとともに王の側に仕えることになったという (Eskandar: 433-4)。

26) コミーは Dowlatiyār Khān Zangane としているが、ザンギャネ族ではなく、スィヤーフ・マンスール族の誤りであろう (KhT: 894-5, 902, 908)。

なか、ハーフにあったサラーム Salāme 城に踏みとどまっていたが、結局、救援を得られずに退却を余儀なくされている。その直後、「古くからズィーク族の墓所 gürkhāne であった」イラン中部のサーヴェ Sāve の統治権を与えられている (KhT: 1083; Eskandar: 414; Afzal, 64)<sup>27)</sup>。ついで、1002/1593 年秋に南東イランの要衝ケルマーンの知事職に抜擢される (Afzal: 13, 139)。もともとこの地域はキズィルバーシュを構成する有力部族アフシャール Afshār 族が 16 世紀の前半からずっと掌握していたところだが、アッバースに反抗的な態度をとったためにこの地域から排除され、同地の知事職はいったん別の部族に与えられた後、ギャンジュ・アリー・ハーンに委ねられたのであった。アッバース 1 世から「父 bābā」と呼ばれた彼は、この後、30 年にわたってケルマーンを統治する (Afzal: 359; Jahan: 215)。

ギャンジュ・アリー・ハーンは、ウズベク族の侵入するホラーサーンをはじめ、アゼルバイジャンやコーカサスをめぐってのオスマン朝との戦闘など、各地の遠征にも動員されている<sup>28)</sup>。実際、この時期の主な戦闘には常に彼の姿があり、ゴラーム出身のアッラーフ・ヴェルディー・ハーン<sup>29)</sup>などと並んで、サファヴィー朝軍を支える百戦錬磨の有力武将の一人となっていた。1622 年 7 月、ムガル朝からカンダハールを征服した際に、アッバースはこの地の統治をギャンジュ・アリー・ハーンに委ね (Ehya: 446; Eskandar: 977-8; Jahan: 204)、彼は 1035/1625-6 年に死ぬまでサファヴィー朝の東部国境の要衝

であるこの地を統治し続けることになった (Eskandar: 1041; Jahan: 215)。

ギャンジュ・アリー・ハーンが重用されたことで、その親族も体制内で一定の地位を得た。息子の一人、シャーロフ・ベグ Shāhrokh Beyg は、王朝の「最も有力なアミールの一人」と目されて、グルジアに遠征に出たが、そこで事故死している (Eskandar: 884-5)。別の息子、アリー・マルダーン・ハーン ‘Alī Mardān Khān は、アッバース 1 世の訓育を受け、父の死後はカンダハールの統治権とハーンの称号を与えられ、「偉大なアミール」の一人と目された (Eskandar: 1041, 1086; Jahan: 327, 357, 762, 763)。しかし、サフィー 1 世 Šafi I (在位 1629-42) の治世に入るとカンダハールでの税収を国庫に送らなかったとされ、処罰を恐れてムガル朝に寝返っている (Jahan: 357; Matthee and Mashita: 2012)。

さらに、ペルシア湾方面の知事職に任じられる例も出てくる。いずれも、ザンギヤネ族に関わるものである。まず、1010/1601-2 年、アッバース 1 世の命令でアッラーフ・ヴェルディー・ハーンがペルシア湾岸のラル Lār 地方を征服した際、配下にあったザンギヤネ族のカンバル・ハーン Qanbar Khān が、同じくペルシア湾岸のダシュテスターン Dashtestān 地方の知事に任じられている (Molla: 236; Afzal: 305, 395; 前田 2009: 119-20)。その後、1631 年に同じくザンギヤネ族のセヴェンドゥーク・スルタン Sevendūk Soltān がバフレイン Baḥreyn の知事に任じられ (Siyar: 148;

27) この時期、ソルターニーエ付近を拠点にドウラティヤール・ハーン・スィヤーフ・マンスールが不穏な動きを見せており、その牽制の意味もあって同じクルド系のギャンジュ・アリー・ハーンがサーヴェに派遣されたものと思われる。事実、1000/1591-2 年にはギャンジュ・アリー・ハーンとコム知事ホセイーン・ベグ・シャームルー Hoseyn Beyg Shāmlū が、ホセイーン・アリー・ハーン・チェギヤニーとともにドウラティヤール・ハーン討伐に派遣されている (Afzal: 96-97)。さらにいえば、ハサン・アリー・ハーン・チェギヤニーが同じ頃に、ハマダーン知事職を与えられたのも、同じ文脈で考えることができよう。

28) Eskandar や Afzal などに多数言及されている。

29) この人物については、Savory 2011 や前田 2009: 63-64, 162-167 などを参照のこと。

Khald: 150, 159), 17世紀後半になるとホセイン・アリー・ハーン Ḥoseyn ‘Ali Khān が1086/1675-76年にクーフギールーイエ Kūhgīlūye 知事となっていることが知られる (Farsname: 488)。サファヴィー朝末期にもザンギャネ族のアブドル・バーキー・ハーン ‘Abd al-Bāqī Khān がこの地域の知事であった (山口 2013: 35, とくに注 8)<sup>30)</sup>。

以上のように、当初は、もっぱらホラーサーンの防衛を任されていたが、さらに広くムガル朝との前線にあるケルマーンやカンダハールなどの防衛、さらにペルシア湾方面の統治にも動員されていった。帝国周縁部での統治に活用されたことがわかる。

#### 4 中央政界での台頭

これら「イランのクルド」が活躍したのは国境防衛だけではなかった。この時期、中央政界においても台頭するものがいた。ザンギャネ族である。先に述べたように、ザンギャネ族はいくつかの集団に分けられてトルコ系諸部族に仕えており、16世紀の段階ではほとんど歴史の表面には現れないが、アッバース1世の時代になって、ペルシア湾岸地域の知事職などをあたえられていった。これらザンギャネ族の支配家系のうちの一つから出たと思われるアーリー(アリー)・バーリー Āli (‘Alī) Bāli がアッバース1世に取り立てられたことで、一族はサファヴィー朝を代表するエリート家系として急速に台頭する。

アーリー・バーリー・ベグについて、あるペルシア語年代記は、以下のように伝える。

彼の出仕については、当初、ファルハード・

ハーン・カラマーンルー Farhād Khān Qaramānlū<sup>31)</sup> に近侍すること molāzemat を選び、その高位のハーンの主馬頭 amirākhorbāshī であった。そして、上記のハーンの殺害事件の後、大きな幸運と貴重なる運のお陰でかの陛下 [アッバース1世] の訓育と恩寵の目にとまり、気高く高貴なる王の主馬頭という偉大なる官職によって栄誉を与えられた。そして、たえず戦場や危険な場所にあつて、勇氣と大胆さを備えた隊商の長であり、勇氣と勇敢の戦場の兵士たちの司令官であった。そして、遠征や討伐において彼の落ち着いた意見が世界の兵たちの古い手引きとなり、軍を飾り戦闘を試みることに於いて彼の堅固な知性が時代の合理的な模範と見なされた (Khald: 335)。

こうして宮廷内部に足がかりを得たザンギャネ一族は、一門内部でイラン西部ケルマーンシャー地方の知事職を独占的に継承するとともに、王の主馬頭職もほぼ世襲するなど宮廷エリートとして地歩を固める。とくに、アーリー・バーリー・ベグの子シェイフ・アリー・ハーンは、第8代君主ソレイマーン Soleymān (在位 1666-94) の大宰相 ṣadr-e a‘zam としておよそ20年間国政を担うことになる。こうしてサファヴィー朝末期に至るまで、ザンギャネ一族は中央・地方ともに多数の役職保持者を輩出していった (Matthee 1994: 80-81, 92; Matthee 2012: 62-74; 山口 2013: 33-34)。

ところで、興味深いことに、同じ時期、クルディスタンにおいて世襲の所領を統治し続

30) ただし、ホセイン・アリー・ハーンは、父シェイフ・アリー・ハーン・ザンギャネ Sheykh ‘Ali Khān (後述) がサファヴィー朝の大宰相であった際に任じられており、アブドル・バーキー・ハーンもまた、おそらく父シャー・コリー・ハーン Shāh-qolī Khān (シェイフ・アリー・ハーンの子) が大宰相であった時期に任地に送られている。いずれも、その後、当時ザンギャネ族の本拠地となっていたケルマーンシャー知事職に任じられていることから (山口 2013: 35)、クーフギールーイエ知事職への任命は、いまや中央政界で最高位を占めるようになったザンギャネ族によるネポティズムの一環でもあったと考えるべきであろう (Matthee 1994: 91-2)。

31) 1598年に処刑されたこの人物については、Röhrborn 1966: 34-37; Matthee 1999などを参照のこと。

けた有力クルド系諸部族、アルダラーン、モクリー、ドンボリーなどの支配家系出身者がみずからの所領から遠く離れた地域の知事職や宮廷での官職を得た例は、多くはない<sup>32)</sup>。たしかにアルダラーン族はヴァーリー *vālī* やベグレルベギー *beyglarbeygī* とよばれてクルド系アミールの中でも別格的な扱いを受けており、サファヴィー朝末期の行政便覧でもその子弟が宮廷で養育を受け小姓に列せられていたこともわかる (山口 2015: 86)<sup>33)</sup>。しかし、アルダラーン族の支配家系出身で、クルディスタン以外の地で官職を得ている例は、知られている限り、ごくわずかである<sup>34)</sup>。サファヴィー朝後期、アッバースの改革を経た新たな体制の中で、「イランのクルド」の活躍が顕著であったことは明白であろう。

## 5 ゴラームの下で

先に示したように、「イランのクルド」の中にはキズィルバーシュのアミールに仕えたものもあったが、16世紀末以降はサファ

ヴィー朝の支配エリート内部でのゴラームの台頭を背景に、ゴラーム出身者の配下に入るものも見られるようになった。上述したアッラーフ・ヴェルディ・ハーンに仕えたカンバル・ハーン・ザンギャネは、こうした例の最初期のものである。以下では、パーズーキー族とチェメシュゲゼク族を取り上げて、さらに検証してみたい<sup>35)</sup>。

パーズーキー族は、先にも述べたように、タフマースブ治世の末期までエレシュキルトあたりにあったが、その後、同地が荒廃し、アミール家系のエマーム・コリー・ベグがアッバース1世のコレチとなったのを機に、少なくともその一部はイラン中部へと移住したことがうかがえる。具体的には、1006/1597-8年の時点で、セムナーン *Semnān* とハールの知事で、王のゴラームであったシャー・コリー・ハーン・ジャルタク *Shah Qoli Khān Jartak*<sup>36)</sup> の配下に入って、対ウズベク戦に参加していた (Afzal: 235)<sup>37)</sup>。その後、1016/1607-8年には、シャー・コ

32) たとえば、ドンボリー族の場合、アッバース1世時代に、マランド *Marand*、サルマース、チョルス *Chors*、バルゴシャード *Bargoshād* といった地域の知事職に就いていたが (Eskandar: 678, 783, 1086; Afzal: 1002)、いずれもアゼルバイジャン地方である。なお、ホシャブ *Khoshāb/Hoşap* やマーカー *Mākū* などを拠点としたマフムディー族はタフマースブ1世死後のオスマン朝とサファヴィー朝の紛争に際し、両者の間を行き来したが (Eskandar: 721; Jahan: 166; Kütükoğlu 1993: 19, 20, 23, 43-45)、結局、オスマン朝側に属することになったと思われ、アッバース時代のアミール一覧には表れない。オスマン朝に臣従したことについては、齋藤 2010: 97-98 も参照のこと。

33) ドンボリー族のアミール一族の子弟のなかにもイスファハーンのサファヴィー朝宮廷で養育されたものもあったようだが (Kashan: 356)、いずれにしても、ドンボリー族自体はアゼルバイジャン地方にとどまった。

34) アルダラーン総督 *beyglarbeygī* キャルブ・アリー・ハーン *Kalb 'Ali Khan* の子ハーン・アフマド・ベグ *Khān Ahmad Beyg* が、1086/1675-76年にケルマーンの警察長官職 *dārūghe* についていたことが知られている (Bardsiri: 433)。

35) 地方の知事職や総督職などに任じられたゴラームが、在地の部族集団など、民族的な出自を越えて、さまざまな集団と紐帯を作り上げつつ任務に当たっていたことについては、前田 2009: 116-133などを参照のこと。先にも述べたように、サファヴィー朝以前のトルコ系王朝期においても、クルド系とトルコ系の諸部族の間に民族的な差異は意識されつつも、それらの間に臣従・同盟関係が成立していたことが知られており、この地域の歴史においては過去にもみられた現象であったことは言うまでもない。

36) この人物は、先に述べた、同時期にハールにあってチェメシュゲゼク族を率いて対ウズベク戦に参加したシャー・アリー (コリー)・ハーンと同一人物かも知れない。ただし、史料間で若干の齟齬がある。エスキヤンダル・ベグが、チェメシュゲゼク族を率いるシャー・コリー・ソルターンが、1010-11/1602-3年にハーンの称号とドルーン *Dorūn* の統治権を与えられたとするのに対し (Eskandar: 631)、ファズリー・ベグによれば、パーズーキー族を率いたシャー・コリー・ハーンは、1016/1607-08年に解任されるまでハールとセムナーンの知事であったという (Afzal: 463)。

リー・ハーンは解任され、ハールとセムナーンの統治権は、同じくゴラームであったホスロウ・ベグ Khosrow Beyg (Molla: 401-2; Eskandar: 1088; Afzal: 463, 509, 701, 754, 802, 824) に与えられ、彼もまたパーズーキー族を率いて各地の遠征に動員されている (Eskandar: 973; Afzal: 463, 509, 701, 754)。その後、彼がアスタラーバード Astarābād 総督<sup>37)</sup>に栄転したことで (Afzal: 824), 1036/1626-7年までにオタル・ハーン Otār Khān がセムナーンとハールのハーケムに任じられ、パーズーキー族のアミールにもなっている (Eskandar: 1089; Afzal: 967; Jahan: 231; Khold: 296)<sup>39)</sup>。その後も、1066/1655-56年までに、同じくゴラームであったジャムシード・ハーン Jamshīd Khān がセムナーンとハールの知事職とともにパーズーキー族も従えている (Qesas: 343; Khold: 461, 570, 577; Jahan: 467, 594, 612)。その後、一時、この地域がハーッセ地 (王領地) になった後、1073/1662-3年、「パーズーキー族は、常に遠征において優れた奉仕に努めてきたが、ハーケムが任じられることがなかったので、ばらばらとなり、その有力者たちが自らの住む地域の住民に対し、略奪を働くことがあったので、パーズーキー族のハーケム職とセムナーンとダマーヴァンドその他の統治権がモルタザー・コリー・ハーン・サアドルー Mortazā Qolī Khān Sa'dlū に与えられた (Jahan: 742)」という。サアドルー族は、もとはチョフーレ・サアド (エレヴァン) 付近にあって、パーズーキー族とも近い関係にあったトルコ系部族であり (Sharaf 1: 315; Molla: 269; Eskandar: 644, 743; Sümer

1992: 20-23; Woods 1999: 196), おそらくそうしたことから、パーズーキー族の管理を委ねられたものと思われる。

チェメシュゲゼク族も、同様の経緯をたどった。先に述べたように、この部族はハールの統治権をもつシャー・コリー (アリー)・ハーンのもとに率いられるようになっていたが、シャー・コリー・ハーン自身は1011/1602-3年にはドルーンに封じられている (Molla: 239; Eskandar: 631; Jahan: 152)。その後、同じくゴラームでドルーンの知事であったユーソフ・ソルターン Yūsof Solṭān が、1047/1637年にホラーサーンに侵入したウズベク族に対しチェメシュゲゼク族を率いて向かっている (Eskandar: 1088; Siyar: 249; Jahan: 283; Khold: 256; Soltani: 255)。ついで、1058/1648-9年に、かつてパーズーキー族を率いていたオタル・ハーンがチェメシュゲゼク族の知事として、アッパース2世によるカンダハール征服に参加し、その後、1059/1649-50年には、カンダハール総督に任じられている (Jahan: 476; Khold: 467)。この後は、チェメシュゲゼク族についての言及は、同時代史料ではあまり見られなくなるが、サファヴィー朝最末期、アスタラーバードのカージャール族と並んで、ホラーサーンの有力部族の一つであったことがわかる (Majma: 17)。

このように、パーズーキー族やチェメシュゲゼク族のように移住させられたのみならずゴラーム出身者の差配を受けるものもあったが、いずれにしても、これらの部族は、その後もイランの東部にあってイランの枠内で生き延びていくことになったのである<sup>40)</sup>。

37) ただし、1012/1603-4年の時点でも、この部族の一部はチョフーレ・サアド付近にいて、一時的にオスマン朝の支配を受け入れていたが、アッパース1世がやってきたときにはせ参じた諸部族の中に、パーズーキー族が混じっていた。したがって、パーズーキー族のすべてがセムナーンやハールに移動したわけではなかった (Eskandar: 644; Afzal: 332)。

38) この総督職はほぼゴラームが独占していた。前田 2009: 78。

39) オタル・ハーンについては、前田 2009: 141-146, 150などを参照のこと。

40) サファヴィー朝崩壊後の、これらクルド系諸部族の動向については、たとえば、Noelle-Karimi 2014: 205-27などを参照のこと。

### おわりに

本稿では、サファヴィー朝による移住政策の一環として、16世紀後半以降、イラン北東部などへ移住させられたクルド系諸部族に焦点を当て、サファヴィー朝の支配を受け入れた他のクルド系諸部族と比較しながら、彼らがどのような特徴をもち、サファヴィー国家の統治機構の中でどのように台頭していったのか、また、彼らの台頭が、16世紀末以降の王朝の支配体制の変動においてどのような意味をもっていたのかを論じた。

これまでの議論は以下のように要約することができる。

まず、クルド系諸部族に対する移住政策は、一般に考えられているのとは異なり、すでに16世紀半ば、タフマースプの時代に始まっていた。サファヴィー朝の強制移住といえば、アッバース1世によるものがよく知られるが、こうした政策はすでにタフマースプ時代にも広く見られたのであった。アッバース1世の改革が、タフマースプの対キズィルバーシュ政策の延長としての性格をもつことは、これまでも指摘されてきたが(羽田1987: 39-43)、移住政策についても、同じことがいえるであろう。

移住の理由はさまざまで、反抗的な部族の処罰という意味合いをもつ場合もあったが、むしろウズベク族の侵入からホラーサーンを防衛することに主眼が置かれていたと言える。ジョン・ペリーが言うところの、ホラーサーンのコサク化(Perry 1975: 204)に活用されたのである。ペルシア湾を含めて言えば、移住させられたクルド系諸部族は総じて辺境防衛に活用されていたことがわかる。

しかし、ここで注目すべきは、すべてのクルド系諸部族が移住の対象になっていたのではなく、相対的に弱小か、あるいは、世襲的な所領への執着が小さい部族を移し替えていったことである。これは決して偶然ではなく、タフマースプ自身の明確な目論見があっ

たと思われる。すなわち、モクリー族、ドンボリー族、アルダラーン族など有力なクルド系諸部族に対しても緩やかに包摂することを図っていたが、彼らが移住させられることはまずなかった。これら頑強に自らの支配地域の維持にこだわり、一定の自立性を確保しようとする諸部族ではなく、より弱小で、サファヴィー朝に依存する部族を巧みに利用したのであった。ホラーサーンへ移住させられたクルド系諸部族が重用されたのは、キズィルバーシュを構成するトルコ系諸部族同様、土着の所領への執着が相対的に薄く、王朝にとって「操作しやすい」存在であったからであろう。

さらにいえば、「イランのクルド」のいくつかは、すでにカラコユンル朝やアクコユンル朝など、サファヴィー朝以前のトルコ系王朝にも仕えた経験をもっており、彼らがサファヴィー朝に早くから臣従したのも、そうした経験が背景にあったともいえる。

ゴラームについても、サファヴィー朝宮廷への出仕が民族的アイデンティティーの喪失には必ずしもつながらなかったことが指摘されているが(前田2009)、同じことは「イランのクルド」についても当然のことながら当てはまる。かれらのうちから「イランの全クルドの大アミール」を任じるなど、その実効性はともかくとして、クルドという民族性を配慮しつつ、有力なクルド系諸部族の統制を図ったことも注目すべきである。

タフマースプ時代にあってはなおトルコ系諸部族が政治と軍事を掌握しており、クルド系諸部族の活躍する余地は比較的小さく、「イランのクルド」のなかにも、ザンギャネ族やズィーク族のように、有力なトルコ系諸部族に仕えるものもあった。とはいえ、チェギャニー族のように移住先で土着化し、周辺のトルコ系部族と結びつつ、力を蓄えていくものもあった。また、スィヤーフ・マンスール族のように、王子の側近として宮廷に食い込むものも現れていた。こうして、徐々にサファ

ヴィー朝の支配体制内部で与えられた新たな環境を生かしつつ実力を付けつつあったのである。

しかし、彼らがサファヴィー朝の権力中枢にまで活動範囲を広げる決定的な契機となったのは、アッパース1世による積極的な登用策であった。チェギャニー族のブーダーク・ハーン、ズィーク族のギャンジュ・アリー・ハーン、ザンギャネ族のアーリー・バーリー・ベグなど、その能力と忠誠心を認められて、王の側近集団の一角に組み入れられることで、彼らは体制内部で枢要な職を手に入れていった。そして、いったん王朝権力の中枢に食い込むと、ザンギャネ族のように、その能力やネポティズムを通じて確たる地位を築いていくものも現れたのである。

とはいえ、こうした変容の過程で、サファヴィー朝国家内で多様な民族的出自をもつ支配層の融合と共生が速やかに進んだというわけではない。むしろ、こうした変化は、必然的に他の諸勢力との競争を惹起し、紆余曲折を含む、複雑な経路をたどった。

まず第一に、クルド系住民に対する偏見は王朝末期に至るまで依然として強かった。ちょうどシェイフ・アリー・ハーンが大宰相位にあってザンギャネ族がサファヴィー朝の政治においてもっとも優勢であった1680年代半ばにイランを訪れたエンゲルベルト・ケンペル *Emgelbert Kaempfer* は、シェイフ・アリー・ハーンについて、「彼の特性は、彼がクルド出身であり、しかもザンギャネ族に属することによって決定的に決められている。ペルシア人たちは、クルド人に対して明確な人種的違いを意識している。ペルシア人たちは、クルド人を頑固で、強情で、いかがわしく、陰険であると特徴づける」と述べている (*Kaempfer: 68; Matthee 1994: 87*)<sup>41)</sup>。宮廷内部で、クルド系のザンギャネ族が力

を持っていることへの反発が小さくなかったことをうかがわせる。

また、ホラーサーンに移住させられたクルド系諸部族が東部各地で知事職を保持するという状況が王朝末期まで持続したわけでもない。ザンギャネ族が中央での権勢を誇っていた時代、かつてイラン東部の知事職を与えられた他のクルド系諸部族は、むしろ後景においやられつつあった。表1が示すように、彼らが知事職を握っていたのは17世紀半ば頃までである。その背景には、ゴラームが辺境統治に活用されるようになったことに関係すると思われる。実際、チェメシュゲゼク族やパーズーキー族などは、一時的であれ、ゴラームがアミールに指導権を与えられている。したがって、彼らがサファヴィー朝政治のプレーヤーとして活躍するようになったとはいえ、他のプレーヤーとの複雑な関係に規定されていたことは言うまでもない。支配層の多民族化の一過程として捉えられよう。

一般にクルド系諸部族は前期サファヴィー朝においてはおおむねサファヴィー朝の権力中枢からは疎外されていた。トルコ系諸部族が実権を握る体制にあっては、体制内に緩やかに統合されていたとはいえ、クルド系諸部族が権力の分け前にあずかることの出来る余地は限られていたと言える。しかし、16世紀後半、とくに末以降、ホラーサーンに移住させられたクルド系諸部族が東部や南部の辺境地域で知事に任じられたり、中央政府で高位に上り詰めたりしたことで、クルド系であってもイランの政治空間において権力の分け前にあずかることが出来るということが、広く認識されていったと考えられる。また、クルド系諸部族の指導者たちも、イラン各地で遠征に参加し、また、知事職に任じられることで、イランの広がりやそこへの帰属意識を深めていったともいえるだろう。トルコ王

41) サファヴィー朝期のペルシア語年代記にも、「悪質なクルド人」との表現がしばしば使われる (*Eskandar: 814; Khold: 152, 165, 190*)。なお、こうしたクルド人イメージは、サファヴィー朝期に形作られたものではなく、おそらくさらに歴史を遡ることができるであろう。

朝として成立したサファヴィー朝が多様な民族的出自をもつエリート層が参画する領域国家イランへと徐々に変貌していくのに、ゴラムの登用が大きな役割を担っていたことは指摘されてきたが（前田 2009: 32）、「イランのクルド」の台頭もまた少なからぬ作用を果たしたといえよう。

## 参 考 文 献

### ●史料●

- Abrahams: Simin Abrahams. 1999. "A Historiographical Study and Annotated Translation of Volume 2 of the *Afzal al-Tavārikh* by Fazlī Khūzānī al-Iṣfahānī." Ph. D. diss., The University of Edinburgh.
- Afshar: Mīrzā Rashīd Adīb al-Sho‘arā. 1346/1967-68. *Tārikh-e Afshār*. ed. Parvīz Shahriyār Afshār va Maḥmūd Rāmīyān. N.P.: Showrā-ye Markazī-ye Jashn-e Mellī.
- Afzal: Fazlī Beyg Khuzani Isfahani. 2015. *A Chronicle of the Reign of Shah ‘Abbas*. ed. Kioumars Ghereghlou. Gibb Memorial Trust.
- Alqab: Mīrzā ‘Alī Naqī Naṣīrī. 1371/1992-3. *Alqāb va Mavājeb-e Dowre-ye Salāṭīn-e Ṣafaviyya*. ed. Yūsuf Raḥīmīlū. Mashhad: Enteshārāt-e Dāneshgāh-e Ferdowsī-ye Mashhad.
- Amini 1: Faḍlullāh b. Rūzbihān Khunji-Iṣfahānī. 1992. *Tārikh-i ‘Ālam-ārā-ye Amīnī*. Persian text edited by John E. Woods, with the abridged English translation by Vladimir Minorsky, revised and augmented by John E. Woods. London: Royal Asiatic Society.
- Amini 2: Fazl Allāh Rūzbehān Khonji-Eṣfahānī. 2003. *Tārikh-e ‘Ālam-ārā-ye Amīnī, Sharḥ-e Ḥokmrānī-ye Salāṭīn-e Āq-qūyūnlū va Ṣohūr-e Ṣafaviyān*. ed. Moḥammad Akbar ‘Ashīq. Tehrān: Mīrās-e Maktūb.
- Badaye: Mīrzā ‘Abd al-Nabī Sheykh al-Eslām Behbahānī. 1389/1990-91. *Badāye‘ al-Akḥbār, Vaqāye‘-e Behbahān dar Zamān-e Ḥamle-ye Maḥmūd Afghān*, ed. Seyyed Sa‘īd Mīr Moḥammad Ṣādeq, Tehrān: Mīrās-e Maktūb.
- Bardsīrī: Mīr Moḥammad Sa‘īd Mashhīzī (Bardsīrī). 1369/1990-91. *Tāzkere-ye Ṣafaviyye-ye Kermān*, ed. Moḥammad Ebrāhīm Bāstānī-Parīzī, Tehrān: ‘Elm.
- Ehya: Ḥoseyn b. Ghiyās al-Dīn Moḥammad. 1344/1965-6. *Ehyā‘ al-Molūk*. ed. Manūchehr Sotūde. Tehrān: Bongāh-e Tarjome va Nashr-e Ketāb.
- Eskandar: Eskandar Beyg Torkamān. 1382/2003-04. *Tārikh-e ‘Ālam-ārā-ye ‘Abbāsī*. ed. Īraj Afshār. 3rd Edition. Tehrān: Amīr-e Kabīr.
- Farsname: Ḥājj Mīrzā Ḥasan Ḥoseynī Fasa‘ī. 1388/2009-10. *Fārsnāme-ye Naṣīrī*. ed. Manṣūr Rastgār Fasa‘ī. Tehrān: Amīr-e Kabīr.
- Hadiqe: ‘Alī Akbar Vaqāye‘-negār-i Kordestānī, 1384/2005-2006. *Hadiqe-ye Naṣīriyye va Mer‘āt al-Ṣafar dar Joḡhrāfiyā va Tārikh-e Kordestān*, ed. Moḥammad Ra‘ūf Tavakkolī, Tehrān: Tavakkolī.
- Hedge: Hedges: William Hedges. 1887. *The Diary of William Hedges Esq. during his Agency in Bengal; as well as on His Voyage Out and Return Overland*, ed. R. Barlow and H. Yule, London, vol. 1.
- Hronika: Husrav ibn Muhammad Banī Ardalān. 1984. *Hronika (Istoriya Kurdsḳogo Knyazhesḳogo Doma Banī Ardalān)*, ed. Evgeniya Il‘inichna Vasileva, Moskva: Nauka.
- Jahan: Mīrzā Moḥammad Ṭāher Vaḥīd Qazvīnī. 1383/2005. *Tārikh-e Jahān-ārā-ye ‘Abbāsī*. ed. S. Mīr Moḥammad Ṣādeq. Tehrān: Pazhūheshgāh-e ‘Ulum-e Ensānī va Moṭāle‘āt-e Farhangī.
- Kaempfer: Engelbert Kaempfer. 1977. *Am Hofe des persischen Grosskönigs 1684-1685*. ed. Walter Hinz. Berlin/Leipzig, repr. Tübingen: Horst Erdmann.
- Kashan: ‘Abd al-Raḥīm Kalāntar Zarrābī, 1378/1999-2000. *Tārikh-e Kāshān*, Īraj Afshār, Tehrān: Amīr-e Kabīr.
- KhT: Qāzī Aḥmad b. Sharaf al-Dīn al-Ḥoseyn al-Ḥoseynī al-Qomī, 1383/2004. *Kholāṣat al-tavārikh*, ed. Eḥsān Eshraqī, Tehrān: Enteshārāt-e Dāneshgāh-e Tehrān.
- Khatunabadi: Seyyed ‘Abd al-Ḥoseyn Khātūnābādī, 1352/1973-4. *Vaqāye‘ al-Senīn va al-A‘vām, yā Gozāreshhā-ye Sāliyāne az Ebtedā-ye Khelqat tā Sāl-e 1195 Hejrī*, ed. Bāqer Behbūdī, Tehrān: Eslāmiyye.
- Khold: Moḥammad Yusof Vāle Qazvīnī Eṣfahānī. 1380/2001. *Irān dar Zamān-e Shāh Ṣafī va Shāh ‘Abbās-e dovvom (1071-1038 hejrī-ye qamarī)*, *Khold-e Barīn*. ed. Moḥammad Reżā Naṣīrī. Tehrān: Anjoman-e Āsār va Mafākher-e Farhangī.
- Majma: Moḥammad Khalīl Mar‘ashī Ḥoseynī, 1328/1949-50. *Majma‘ al-tavārikh*, Tehrān: Eqbāl.
- Masture: Mastūre. 1946. *Tārikh-e Ardalān*, ed. Nāṣīr Āzādpūr, Sanandaj: Bahrāmī.
- Molla: Mollā Jalāl al-Dīn Monājjem. 1366/1987-8. *Tārikh-e ‘Abbāsī yā Rūznāme-ye Mollā Jalāl*. ed. Seyf Allāh Vaḥīd Niyā. N. P.: Vaḥīd.
- Nasrabadi: Moḥammad Ṭāher Naṣrābādī. 1378/1999-2000. *Tāzkere-ye Naṣrābādī*. ed. Moḥsen Nāji Naṣrābādī. Tehrān: Asāṭīr.



- Noqavat: Maḥmūd b. Hedāyat Allāh Afūshte-ye Naṭanzī. 1373/1994. *Noqāvat al-Āsār fi Zekr al-Akhyār*. ed. Eḥsān Eshraqī. Tehrān: Sherkat-e Enteshārāt-e ‘Elmi va Farhangī.
- Occupation: Willem Floor (ed. and trans.). 1998. *The Afghan Occupation of Safavid Persia 1721–1729*. Paris: Association pour l’Avancement des Études Iraniennes,.
- Qesas: Vali Qolī Shāmlū. 1371–74/1992–6. *Qesas al-Khāqānī*. ed. Seyyed Ḥasan Sādāt Nāserī. Tehrān: Vezārat-e Farhang va Ershād-e Eslāmī.
- Rowzat: Mirzā Beyg Ḥasan b. Ḥosaynī Jonābādī. 1378/1999–2000. *Rowzāt al-Ṣafaviyye*. ed. Gōlām-Rezā Majd Ṭabāṭabā’ī. Tehrān: Bonyād-e Mowqūfāt-e Doktor Maḥmūd Afshār.
- Shahriyaran: Moḥammad Ebrāhim b. Zayn al-‘Ābedin Naṣirī. 1373/1994–5. *Dastūr-e Shahriyārān*. ed. Moḥammad Nāder Naṣirī Moqaddam. Tehrān: Bonyād-e Mowqūfāt-e Doktor Maḥmūd Afshār.
- Sharaf 1: Prince de Bidlis Scheref. 1860. *Scherefnameh ou Histoire des Kourdes*, publiée par V. Véliaminof-Zernof, Tome I et II, Académie Impériale des Sciences, St.-Pétersbourg, rep., Tehrān: Asāṭir, 1377/1998–99.
- Sharaf 2: Sharaf al-Dīn Bitlīsī. 2005. The Sharafnama, or, The History of the Kurdish nation; English translation and commentaries by Mehrdad R. Izady, Costa Mesa: Mazda.
- Sharif: Mollā Moḥammad Sharif Qāzī, 1379/2000–2001. *Ẓobdat al-Tavārikh-e Sanandajī*, ed. Moḥammad Ra’ūf Tavakkolī, Tehrān: Tavakkolī.
- Siyar: Moḥammad Ma’šum Eṣfahāni b. Khvajagī. 1368/1989–90. *Kholāṣat al-Siyar*. ed. Īraj Afshār. Tehrān: ‘Elm.
- Soltani: Seyyed Ḥasan b. Mortazā Ḥoseynī Astarābādī, 1366/1987–88. *Az Sheykh Ṣafī tā Shāh Ṣafī, az Tārikh-e Soltānī*, ed. Eḥsān Eshraqī, Tehrān: ‘Elmī.
- Tadhkirat: Anonym. 1943. *Tadhkirat al-Mulūk, A Manual of Ṣafavid Administration (circa 1137/1725), Persian Text in Facsimile (B.M. Or. 9496)*. trans. Vladimir Minorsky, Cambridge: E. J. W. Gibb Memorial.
- Takmelat: ‘Abdī Beyg Shirāzī. 1369/1990–91. *Takmelat al-Akhhār (Tārikh-e Ṣafaviyye az Āghāz tā 978-e hejri-ye qamarī)*. ed. ‘Abd al-Ḥoseyn Navā’ī. Tehrān: Nashr-e Ney.
- Tohfe: Mirzā Shokr Allāh Sanandajī (Fakhr al-Kottāb), 1366/1987–1988. *Tohfe-ye Nāserī dar Tārikh va Joḡhrāfiyā-ye Kordestān*, ed. Hashmat Allāh Ṭabibī, Tehrān: Amīr Kabīr.
- Zeyl: Eskandar Beg Torkamān Monshī va Moḥammad Yusof Movarrekh, 1317/1938–39. *Zeyl-e Tārikh-e ‘Ālam-ārā-ye ‘Abbāsī*, ed. S. Khvānsārī, Tehrān: Eslāmiyye.
- Mohsen: Moḥammad Moḥsen Mostowfī. 1375/1996–97. *Ẓobdat al-Tavārikh*, ed. Behrūz Gūdarzī, Tehrān: Bonyād-e Mowqūfāt-e Doktor Maḥmūd Afshār.
- ウマリー：「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー『高貴なる用語の解説』訳注(5)」(谷口淳一編)『史窓』71(2014)：1–24.

●研究文献●

- Herzig, Edmund. 1990. “The Deportation of the Armenians in 1604–1605 and Europe’s Myth of Shah Abbas I,” *History and Literature in Iran, Persian and Islamic Studies in Honour of P. W. Avery* (Charles Melville, ed.), 59–71, London and New York: British Academic Press.
- James, Boris. 2016. “Mamluk and Mongol Peripheral Politics: Asserting Sovereignty in the Middle East’s “Kurdish Zone” (1260–1330).” *The Mongols’ Middle East: Continuity and Transformation in Ilkhanid Iran* (Bruno De Nicola and Charles Melville, eds.), 277–305, Brill.
- Kütükoğlu, B., 993. *Osmanlı-İran siyasi münâsebetleri (1578–1612)*, İstanbul Fetiḥ Cemiyeti, İstanbul.
- Maeda, Hirotake. 2006. “The Forced Migrations and Reorganisation of the Regional Order in the Caucasus by Safavid Iran: Preconditions and Developments Described by Fazli Khuzani,” in IEDA Osamu and UYAMA Tomohiko (eds.), *Reconstruction and Interaction of Slavic Eurasia and Its Neighboring Worlds*, Sapporo: Slavic Research Center: 237–273.
- Matthee, Rudi and Hiroyuki Mashita. 2012. “Kandahar iv.” *Encyclopaedia Iranica*.
- Matthee, Rudi. 1994. “Administrative Stability and Change in Late-17th-Century Iran: The Case of Shaykh ‘Alī Khān Zanganah (1669–1689).” *International Journal of Middle East Studies*, 26-1: 77–98.
- Matthee, Rudi. 1999. “Farhād Khan Qaramānlū, Rokn-al-Saltāna.” *Encyclopaedia Iranica*.
- Matthee, Rudi. 2012. *Persia in Crisis, Safavid Decline and the Fall of Isfahan*. London and New York: I.B. Tauris.
- Noelle-Karimi, Christine. 2014. *The Pearl in its Midst: Heart and the Mapping of Khurasan (15<sup>th</sup>–19<sup>th</sup> Centuries)*. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Perry, John R. 1975. “Forced Migration in Iran during the Seventeenth and Eighteenth Centuries.” *Iranian Studies*. 8/4: 199–215.

- Posch, Walter. 2003. "What is a Frontier? Mapping Kurdistan between Ottomans and Safavids." *Irano-Turkic Cultural Contacts in the 11th-17th Centuries* (E. M. Jeremias, ed.), 203-215, Pilschaba: The Avicenna Institute of Middle Eastern Studies.
- Röhrborn, Klaus Michael. 1966. *Provinzen und Zentralgewalt Persiens im 16. und 17. Jahrhundert*. Berlin: Walter de Gruyter & Co.
- Savory, Roger. 2011. "Allāhverdi Khan (1)." *Encyclopaedia Iranica*.
- Sönmez, Ebru. 2012. *İdris-i Bidlisi, Ottoman Kurdistan and Islamic Legitimacy*. Istanbul: Libra.
- Sümer, Faruk. 1992. *Kara Koyunlular (Başlangıçtan Cihan-Şah'a kadar)*. 1. Cilt. Ankara: Türk Tarih Kurumu Basımevi.
- Woods, John E. 1979. "Turco-Iranica I: An Ottoman Intelligence Report on Late Fifteenth/Ninth Century Iranian Foreign Relations." *Journal of Near Eastern Studies*, 38(1): 1-9.
- Woods, John E. 1999. *The Aqqyunlu, Clan, Confederation, Empire*. Revised and Expanded Edition. Salt Lake City: The University of Utah Press.
- Yamaguchi, Akihiko. 2012. "Shāh Ṭahmāsp's Kurdish Policy." *Studia Iranica*, 41: 101-132.
- Yamaguchi, Akihiko. 2015. "The Safavid Legacy as Viewed from the Periphery: The Formation of Iran and the Political Integration of a Kurdish Emirate." *Mapping Safavid Iran* (Nobuaki Kondo, ed.), 127-154, Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- 齋藤久美子 2010 「16-17世紀アナトリア南東部のクルド系諸県におけるティマール制」『アジア・アフリカ言語文化研究』78: 79-112.
- 羽田正 1987 「シャー・タフマースプのキジルバシュ政策」『オリエント』30/2: 28-46.
- 前田弘毅 2009 『イスラーム世界の奴隷軍人とその実像 17世紀サファヴィー朝イランとコーカサス』明石書店.
- 山口昭彦 2007 「シャー・タフマースプの対クルド政策」『上智アジア学』25: 81-123.
- 山口昭彦 2011 「サファヴィー朝 (1501-1722) とクルド系諸部族: 宮廷と土着エリートの相関関係」『歴史学研究』885: 157-166.
- 山口昭彦 2013 「後期サファヴィー朝有力家系の戦略的資産形成: ザンギャネー族の「財産目録」を手がかりに」『アジア・アフリカ言語文化研究』86: 31-54.
- 山口昭彦 2015 「周縁から見るイランの輪郭形成と越境」山根聡・長縄宣博編著『越境者たちのユーラシア』, 79-104, ミネルヴァ書房.